

FAIRY TAIL 清心の姉妹

加賀辺

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

様々な魔法を使うFAIRY TAILのメンバーと一緒に過ごす心に関する魔法を使うサイカ||カインドという少女

たくさんの人のおかげでなんとか今まで過ごしてこれた彼女は色々な人を癒しつつ、自由奔放な仲間と一緒に毎日を楽しく過ごしている

目次

第一章 始まり

第一話 私、サイカっていいいます！ 1

第二話 お隣さん獲得作戦 5

第三話 愛され少女 9

第四話 ハーブヒーラー 15

第二章 鉄の森

第五話 心竜の滅竜魔道士 21

第六話 妖精 32

第七話 心の滅竜魔法 43

第三章 幽鬼の支配者

第八話 エマIIカインド 56

第九話 燃心竜 66

第一章 始まり

第一話 私、サイカつていいいます！

いつもは騒がしいギルドの中、落ち着きのある二人がカウンターで話をしていた。

「今日はまだ静かですね〜ミラさん」

黒髪の少女、サイカはそう言つてハーブティーの入ったグラスを傾ける。

「そうね、けれどそろそろ帰つて来るんじゃないかしら？」

「ナツさんですか〜イグニールさんを探すんだつて町に行つたんですよ…」

ドラゴンが町にいるはずないつて言つたんですけどね…」

それでも行つちやうんだもんなあ、ぼそりと不満そうに彼女は呟く。

「ただいまー！」

そんな事を考えているとナツさんの大きな声が聞こえてくる。

「帰つてきたみたいだね」

「そうみたいですわね」

そう言つて、振り返りギルドの入口を見てみると、何故かナツさんとハッピーが女の人を連れていた。

「ミラさん、あの人誰でしょう？」

「あら、妖精の尻尾フェアリーテイルに入りたい人かしら？」

「あそこでぼーつとしていると、多分危ないですよね、早く迎えてあげないといけないんじゃないですか？」

「そうね、早くいきましょ」

私とミラさんは、目をキラキラと輝かせながらキョロキョロと辺りを見回している女性のところまで、テコテコと歩いて行つた。

先にあちらが気づいたようで、こちらを見て

「ミラジェーン!? キャー! 本物〜」

と興奮気味に走つてきた。

カウンターから入り口辺りまで歩くごく少ない時間でナツさんはいつも通り喧嘩を始めてしまう。

ミラさんが机の陰に隠れるよう興奮気味の女性を促し、そこで私達は話を始めた。

「こんにちは！新人さんですか？」

にこやかに少女は声をかける。

「えっと私はルーシィ、あなたもフェアリーテイルの魔導士なの？」

「そうですよ！私はサイカっています、えっとサイカⅡカインドです！」

「え!?こんな子供が!!」

少し大きな声で驚く。

「む！確かに子供ですけど立派なフェアリーテイルの魔導士ですよ！」

そう言って右腕の紋章を見せる。

「ほんとに…?」

「ううこの人失礼です」

そう言ってミラさんの方に振り返る。

「まあ少しは驚くかもしれないわね、うちのギルド色々な噂たってるからね」

それを聞いて合点のいった私はなるほど手をうつ。するとどこからか飛んできたコップがミラさんの頭に直撃した。

「うわあ!?ミラさん大丈夫ですか！皆さん少しやり過ぎです！そろそろストップです！」

そう言って私は服の袖からつたを伸ばし、いつものように皆を縛りつけた。

「怪我人が出てます！血が出てます！そろそろおしまいですよ！やり過ぎ厳禁です！」

皆が少し落ち着いた中ナツさんだけが暴れ。

「離せ、俺はまだ暴れたりねえ！」

そう言ってつたを燃やそうとしてきた！

「それは駄目です！植物にも命が！」

私は咄嗟に、ナツさんを縛っているつたから花を咲かせ睡眠作用のある花粉を浴びせた、するとナツさんはすぐにガーといびきたてて眠ってくれた。

「ふう〜燃やされなくて良かった、少し眠って頭を冷やしてください！皆さんも喧嘩するならせめて流血沙汰にはしないでつて言つてますよね！もう、皆さん子供なんですから〜」

そう言つて皆の拘束をとく。

「はっはっはっ、ギルドで最年少の子に子供扱いされるなんてまだまだじゃの」

そう言つてマスターが歩いてきた。マスターはルーシーさんを見て

「新入りさんかの？」

そう聞くと少し緊張した面持ちでは、はいとルーシーさんは答える。

「これからよろしくの、けれど手続きの前にこいつらに連絡事項があるんじゃない

少し待っていてくれ」

そう言い終わるとマスターは評議院から送られてきた文書を読み上げていった。

内容はいつも通りみんなが起こした問題の数々を羅列したものだ

「サイカは、皆色々問題起こしすぎだよとため息を吐きながらマスターの話聞いていた。

「最後にサイカ」

「嘘、私ですか!？」

何も問題を起こしていないはずのサイカは自分の名前を呼ばれ驚いた。

「サイカには評議院からではなく、町の子供からお礼の手紙と依頼が届いておる」

「え、ほんとですか！ふふっ嬉しいなあ〜あ、マスター、私に対しての評議院からの文書は？」

「サイカは問題を起こしておらんから当然文書は届いておらん、さすがじゃ」

それを聞いてサイカは安心する。

「じゃがなこんな文書などどうでもいいんじや、評議院のバカ共など怖れんでよい！自分の信じた道を進めい！」

「それがフェアリーテイルの魔導士じゃ！」

その言葉を聞き皆が各々に声をあげる。

少し前までの静けさはどこかへ消えギルドの中は色々な声で溢れていた。

「あ、ルーシイさんこんな騒がしいギルドですけど大丈夫なんですか？」

「たしかに少しは驚いたけど、私は前からフェアリーテイルに入りた
いと思ってたのよ、それに私は楽しそうなギルドだなど思ってるわ」

笑顔でそうルーシイさんは答えた。

「そうですか、じゃあこれからよろしくお願いしますねルーシイさん
!!」

「私の方こそよろしくねサイカ！」

私達はそう言って笑いあった。

第二話 お隣さん獲得作戦

「これでフェアリーテイルの一員よ、あらためてようこそフェアリーテイルへ」

ミラさんが紋章を入れてあげたことによりルーシイさんは晴れて私たちの仲間になった。

「ところでルーシイさんって住むところ決まってるんですか？」

「それがまだ決まってないのよ、ここの近辺で探したいんだけどね」

「それなら良いとこありますよ！」

「え、本当!？」

「はい本当ですよ〜じゃあ早速行きましょ〜」

そう言つてサイカは半ば興奮気味にルーシイさんを引っ張り、ある家に向かった。

「ここです〜！」

そう言つて家を指差す

「へえ見た目は良い感じね」

「でしょ〜内装も良い感じなんですよ、それにこの大きさと家賃は7万Jなのです！少し高いかもですけどお得なのは確かですよ〜」

「たしかに商店街も近いしありね……つて何でサイカ、あんた家賃まで知ってるの？サイカの知り合いが貸してるとか？」

「私が住んでる家の大家さんがここも貸してるので知ってるだけですよ〜ちなみに私の家は隣ですよ〜」

「あ、だから知つてたのね」

「ちようど大家さん今日家に来るのでその時、内装とか見せてもらいましょ〜」

「急にそんな事頼んで大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ、大家さん優しいですし」

「まあここで待つのもあれですし、私の家で待つてましょ〜」

そう言つてドアを開けるがルーシイさんがもじもじとしていたのでルーシイの手を引っ張り家の中に招き入れた。

私はルーシイさんを玄関を出てすぐにある応接室にとおす

「じゃ、ルーシイさんそのソファに腰かけてて下さい、私はハーブティーいれてきますので〜」

そう言うときサイカは奥のキッチンへと向かい、ハーブティーをいれる。

いつもお湯はかかさないようにしていて良かったとサイカは心の中で呟いた

「ルーシイさんお待ちせしました〜」

そう言うとき部屋に入るとハーブティーの良い香りが部屋中に広がる。

「うわぁ良い匂い、これなんていう葉使ってるの?」

「5、6種類の植物を自分でブレンドして作ってるんです、けどその植物かなりマイナーな植物ですけど聞きますか?」

「じゃあいいや、わかんないだろうし、けど自分でブレンドするなんてこってるわね」

感心したようにうなづく

「それでも魔法で植物も使ってますし、それなりに詳しいんですよ!」
私はえっへんとない胸をはる。

ん? 誰ですか? 今私の胸がないっていったの、ありますからね! 私胸ありますからね! まだ少し発展途上なだけですからね! 別にルーシイなんてうらやましくくないですよ〜だ。

「どうしたのサイカ?」

「あ、いえなんか嫌な地の文を見つけた気がしまして、気にしないで下さい」

「そ、そう……?」

と不思議そうに首をかしげる

「とりあえず、飲んでくださいよ、ギルドでも私のハーブティーは美味しいって評判なんですよ!」

「へえ、そうなんだ、じゃあいただきます」

そう言うときルーシイさんがハーブティーを一口飲む。

「あ、美味しい。初めて飲んだのになんだか懐かしい味で落ち着く」

「ふふつ、ルーシイさんのためにさつきブレンドしたんですよ、緊張緩

和と疲労回復の効果がある植物を使ったんです、ギルドにさつき入ったばかりなので、この効果がぴったりかと思つてブレンドさせてもらいました。」

「そんなに考えてくれてたのね……」

ルーシイさんが驚く

「そんなの当然ですよ！仲間なんですし。あ、よかつたら少し持つて帰ります?」

「え、いいの、ありがと!」

「これくらいのものでしたらいつでもどうぞ、隣に住むかもですし」
そう言つてサイカはブレンドした葉を袋につめて渡す。

するとコツコツと扉をノックする音が聞こえる。

「サイカちゃんいるかい?」

「あ、はい、いますよ、鍵も空いています」

それを聞くと大家さんが扉を開け中に入ってきた。

「あれ、この人はサイカちゃんの友達かい?」

「はい、同じギルドのルーシイさんです、今家を探してるみたいで隣の家の内装とか見せてあげてもらえませんか?」

「ええ、いいわよ。それでサイカちゃん今月の家賃は?」

「あ、ちよつと待つてください今取り出しますんで」

そう言つてタンスの中から家賃の入った封筒を取りだし大家さんに渡す

「はい、きつちり受け取ったわ、じゃあ隣見に行きましようか」

「ではでは、さつそく行きましょ」

そう言つてサイカ達は隣の家に向かった。

「間取り的には隣とそんなにかわらないのよ、入つてすぐに一部屋あつてその奥がキッチン、二階は仕切りがあるけど一様そのまま一つの部屋として使える感じになつてるわ」

「私は、二階は一つの部屋として使つてます」

「サイカちゃん本当に部屋として使つてるの?あれはもう、植物園じゃないかしら?」

「大家さん、言いすぎです……そこまでじゃないですから……」

「そうかしら……家の中森みたくないでね……」

「あはは、玄関からすぐの部屋は大丈夫ですよ、お客さん来ますし」

そう言うとな家さんが心配だわと小さく呟いた。

一通り家の中を見て回ったサイカ達はもう一度私の家の中にいた。

「それでルーシイさんお家どうするんですか？」

「あの大ききで月7万なのよね……」

「そうよ、格安でしょ、どう借りる？」

「月7万は少しきついかもしれないけどきつと大丈夫ね。よし、私あの家に住もうと思います！」

その言葉にサイカは喜ぶ

「やったくおとなりさんがルーシイさんだ、私おとなりさんと仲良しになるの憧れてたんです」

「いや、サイカ私達もう仲良くなってると思うんだけど」

「はっ!?! たしかに!?!」

今気づいた……まあいつかと心の中で呟く

「まあルーシイさんがおとなりさんならどつちにしろ嬉しいのですよ、これから毎日のように私の家に遊びに来てくれても良いんですよ!?!」

「ふふ、さすがに毎日のようには来ないと思うけど、よろしくね！」

こうして、ルーシイさんは私のとなりの家に住むようになり、サイカは念願のおとなりさんを手に入れる事ができた。

ギルドにも人が増え、これから楽しくなりそうだなとサイカは感じていた。

第三話 愛され少女

この日私は仕事に来ていた。

少し前に山菜取りの依頼を受けた村の子供達に好かれた様で、今回もまた村での依頼が来たからだ。

まさか私を指名で依頼がくるなんて思ってもみませんでした。が、やっぱり嬉しいものです。まあそういうわけで村まで来たのですが……

「お姉ちゃんこっちで遊ぼう」

「お姉ちゃんはこっちで俺たちと遊ぶんだ！」

「お姉ちゃん……本読んで……」

村に入つてすぐに子供達が私を取り合い始めてしまい山菜取りに行けません……

「ごめんね、みんな、先に山菜取りにいかないといけないの、だからちよつと待っててね、山菜取り終えたら遊んであげるからね」

そう言つて子供達の拘束から逃れ山菜を取りに行こうとすると、1人が私も行くと言いついてこようとした。

それを聞いた他の子は私もいく、私もいくと連鎖的に言い始め、結局みんなが私も私もと言い始める始末……

そうして私は村長に了承を得て村中のほとんどの子供を連れていくことになった……

どうしてこんな大所帯に、わたしの後ろに十数人いるんだけど……そんなことを思っていると後ろにいた女の子が

「お姉ちゃんどれ採ればいいの？」

と聞いてきた。

「もう少し行つたら山菜採りに良い場所があるからちよつと待っててね」

「はーい」

私は植物と心を通わせ山菜が多くある場所を教えてもらえるから山菜採りみたいな依頼は得意なのだ。

山菜が多く生えているところに着き子供達に採って欲しい山菜を

教えると、子供達は我先にと山菜を採りに動き出した。

「私がお姉ちゃん役にたつの！」

などという声がそこかしこから聞こえてくる気がするけど気のせいだろうか……

もし本当に言ってくれてるなら私だけ好かれてるんだ？ 私特にこれといってなにもしてないと思うんだけど……

山菜採りは子供達のお陰もありお昼までには必要数を軽く越えるほど集まった。

「よし、帰ろっか！ ありがとうね、みんなのお陰で早く終わったよ〜」
「ふふっ、お姉ちゃんのためならこれくらいどうってことないよ！」

ありがとうね、とみんなの頭を撫でると子供達は笑みをこぼした。

さっそく私は子供達と村まで歩いていくと、そこには田畑を荒らされ、家を壊された村があった。

私はすぐに村長の所に向かい何があったのか話を聞いた。

「何があったんですか!？」

「ああサイカさんか、最近ここらで噂になってたチンピラどもがこの村で暴れよってな、作物や金品を盗んでいってしもおた、わしらも応戦はしたのじゃがチンピラどもは魔法を使えるようで、手も足も出んかったんじゃ……」

そう言っって悔しがる村長も右手にけがをしていた。

「村長さん、右手出してください、治療しますので」

私は出された手に左手をかざし魔法を使う、すると村長さんの右手のけがはみるみるうちに消えていった。

村長は驚いた顔をしていたが、そんな事はお構い無く、話を続ける。
「そのチンピラはどこに行っただんですか？ 私が全て取り返してきますんで」

「無理です！ サイカさんがいくら魔導士とはいえどまだ子供じゃないですか！ 大人が何人にかかっても全く歯が立たなかつたんですよ！ それに相手は三人いたんですよ！」

「子供扱いしないで下さいよ、それに私はこれでもフェアリーテイルの魔導士ですよ、そこのチンピラに負けるわけありませんよ！ だか

「早く教えて下さい！」

「…わかりました、村の南の門からチンピラは出ていきました、南側は一本道なので急げば追い付けると思いますが」

「了解です！じゃあ大船に乗ったつもりで待っていてください！」

そう言つて私は村長の家を出た。

家の前には子供達が集まっており、どうやらさっきの話が聞こえていたのか不安そうな顔をしていた。

「ふふっ、大丈夫ですよ！お姉ちゃんは強いですから」

「本当に？けがもしない？」

それを聞いてきつと右手を隠す

「けがもしないように気を付けるね〜」

そう言つてポンポンと頭を叩く

「それじゃあ、行つてくるね〜」

そう言つて私はチンピラどもを追いかけた

はてさて、大見得切つて来たのはいいけど強い人たちだったらどうしようか、困つたな私の魔法はあんまり戦闘向きじゃないんだけだなあ……

けがしないであつていわれたけど現時点でもう右手けがしてるし

……

とりあえず包帯巻いとこうかな。

いや、負ける事を考えたりするのはよくないな、村の人達を傷つけて金品を奪つてく酷い人は許せないからね。

例えばどんな人でもあんまり傷つけないけどこの場合は仕方ないかな。

そう覚悟を決めたとき前の方に荷車を押した三人組の人影が見えた、私はすぐに近づき話しかける。

「こんにちは、すごい荷物の量ですね、手伝いましょうか？」

「はあ!?急になんだよ！」

「ところで皆さんはどこから来たんですか？この辺なんて村くらいしかありませんけど？」

「え、ああ俺たちは旅してんだよ、それでたまたまここを歩いてるつて

わけ」

「そんな大荷物で旅ですか？あと知ってます？この辺の村で金品を盗む三人組が現れたんですって」

それを聞き 三人組は敵対心を剥き出しにする。

「あんだ、村の人間か？」

「いえいえ違いますよ！私はあなたの方が持つてる盗品を元の持ち主に返してあげたいだけですよ」

そう言つて笑顔のまま三人をこっそり出しておいた蔦で締め上げる。

「さつきと返してくるなら、特別にけがさせませんし、痛いおもいもしませんよ」

「はっ、これくらいで勝った気かよ」

三人組の一人がそう言つと蔦を全て切り全員を助け出す

「はあ、返してくれないんですね……」

「はん！てめえみたいな子供に負けるかよ、魔法を多少使えるらしいが俺達は三人もいるんだぞ」

「だからどうしたんですか？どうせ三人とも少し魔法が使えるだけでしょ」

「はあ、これだからガキは、身の丈を知れつての！」

そう言つて剣を私に向けてくる、魔法剣士だろうか？

他の一人は自分の筋力を強化する魔法だろうか、一回り大きくなつた気がする。

もう一人は何の魔法を使うんだろうか？

とりあえず私は魔法剣士との間合いを一気につめ、顔の間近で爆発花を咲かせ爆発させるよろめいた魔法剣士に足払いをし、倒れたところの草を成長させ全身に巻きつけ地面に固定する。

それを見てすぐに強化の魔導士がこちらに走つて来たが、彼の周りに爆発花の花畑をつくりだし一言

「その花には触れない方がいいですよ、触れたら爆発しますから、一つ爆発すれば全てに誘爆しますよ」

とだけ言つと大人しくその場から動かなくなった。

「じゃあ、あとはあなただけですな」

そう言ってもう一人のチンピラを見る

「すまない許してくれ！俺達が悪かった金品は返すから許してくれ！」

「はじめからそう言ってくださればこんなことしなくても良かったのに……では盗品は返してもらいますね、あとこれから、こんなことしないようにしてくださいね、もしまた同じような事をしていところを発見しようものなら容赦しませんよ」

そう言っつていつの間にか荷車から落ちていた盗品を拾おうと屈みそれに触れた瞬間私の動きが止まった

「え、体が動かない……」

「はっ、かかったな俺の術式に！」

「術式なんて使えるんですか!?!なら盗みなんてせずに魔導士ギルドに入ればいいのに」

「そんな事言ってる余裕はあるのかな、自分が今どういう状況かそしてどういう格好をしているのかわかってるのか？見方によつたら俺に尻を突きだしてるようにも見えるぞ」

「下劣です……クーちゃんよろしく」

私がそう言うのと術式使いの足元から生えたウツボカズラのような植物が彼を飲み込んだ、中で彼が暴れているのがわかるが時間がたつごとに抵抗は小さくなり、ついには抵抗しなくなった。

私にかかつていた術式は数分でとけ、私は何とかあの恥ずかしいたいせいから戻ることができた。

私は三人（特に術式使い）をこっぴどくしかりつけて、盗品を持って村まで帰った。

村に帰ると今度は私がこっぴどくしかられるはめになったのだけれど……

子供達にけがしてる事を責められた……

金品等は返ってきたものの、田畑や家屋の修復にはまだ時間がかかりそうなので、私も手伝うために村に泊まらせてもらうことになった。

その事を子供達に伝えるとけがの事など忘れて喜んでくれていた
たのでまあ良しとしよう…

数日は子供達が私を取り合う生活が続くのかなあ……

まあ悪くはないかなこんな風な息抜きも、そう私は思うのだった。

第四話 ハーブヒール

ふわあゝ眠たいです……

疲れがとれきってないですね。

村の修復に意外と時間がかかって三日間村に泊まることになりましたよ……

子供達はすごい喜んでましたけど、まあ三日で終わったのでまだいいんですけどね、今日は予定が入っているので手伝えないですし。

さあて今日もお仕事です！

実は私自営業でお店をしてるんですよ！

お店といってもお悩み相談室みたいな感じですけど……

あ、ちなみに基本予約制になってます！

ガチャと急に扉が開く

そこには三ヶ月程前に相談に来た青年の方が、笑顔を浮かべてはいるが今にも倒れそうな様子で戸口に立っていた。

「大丈夫ですか!?!」

「大丈夫ですよ」

「そ、そうですか……」

それで今日はどうしたんですか……?

「まずですね、この前はありがとうございました！サイカさんの言った通り勇気を出して告白したらオツケーもらえたんです!」

「それは良かった!おめでとうございます!ん?てことは彼女がいるのにこんなところに来てるんですか!?!彼女さんがかわいそうです!彼女さんに内緒で女の人と二人きりで会ってるなんて知れたらどれ程悲しむか……!」

「ちよつと待って、ちよつと待って、別に僕はやましい気持ちでここに來てるわけじゃないんだけど」

少し困ったようにお客様が言う

「分かってますよ、ただの冗談です、けれど女の人と二人きりで会うのはあまりよくないですよ」

「た、たしかに……けれどこんなこと相談しようと思ったらサイカさん

のところかなあと……」

「はあくまあとりあえず相談は聞きますね〜」

内容によつては早く帰らせて家で寝てもらいましょう、なんだか今にも倒れそうですし……

「実は、ここ一ヶ月彼女と会えてないんだ」

「一ヶ月もですか!?!何でそんな事に?」

「仕事が凄く忙しくてまとまった休みがとれないんだよ。

まとまった休みがないと彼女に会いに行くこともできなくてね

……

なんせ片道だけで半日かかるんだ」

「は、半日ですか!?!しかも片道……」

行つて帰るだけで一日がつぶれてしまうのですか……

「だから最低でも二日連続で休みが欲しいんだけど、しないといけな
い仕事があまりにも多くつて二日も休んでられないんだよ、今日も仕
事に行く前にここによつていているくらいだしね……」

「なるほど……」

わかりました、じゃあとりあえずマッサージするのでそのベッド
でうつ伏せに寝転がっててください、私はハーブティーを用意します
ので〜」

「え!?!相談の答えは?」

「マッサージしながら言います〜」

そう言つてハーブティーを用意しにキッチンへ向かう

ハーブティーを準備した私はお客様にマッサージを始める

「とりあえず今は無駄な時間を省くのが一番必要な事ですね!」

お客様は私の言っている事の真意が伝わらなかつたのか

「一様使える時間は全て仕事に使つてるのですがね……」

そう言い首をかしげていた。

「正直いつてその悩みを解決する方法は一つしかないと思うんです」

「それは!?!」

お客様はガバつと身を起こす。

「マッサージ中なので動かないでくださ〜い」

「すいません…」

それで解決法とは？」

「仕事を早く終わらせるしかないかと！」

「……それができれば苦労しませんよ」

困った顔をしてお客様が言う

「わかってますが、それしかないんです、このままだと仕事を終わらせるのにどれくらいかかりそう何ですか？」

「あと、一ヶ月位……」

「じゃあ半月もしくはは一週間程我慢してください、そうすれば仕事も終わるはずです」

マッサージ中なのにまたお客様がガバツと顔をあげる

「本当ですか!？」

「うゝマッサージ中ですから動かないでくださいって！」

「すいません…」

「ようは仕事の効率をあげればいいんですよ。体が元気ですと仕事の効率上がるので体を元気な状態に保つべきなんです」

「たったそれだけでいいんですか？」

驚いたように聞いてくる

「まあ他にも色々やりますけどね。」

まずお客様は今体中が疲れてるうえに睡眠不足、さらには彼女さんにも会えてないというストレスのせいで心身ともにボロボロなんですよ。

自分でも分かってたでしょ？昨日も夜遅くまで仕事してたんでしょー。」

「その通りです…」

早く終わらせようと遅くまで仕事を…」

「それじゃあ駄目ですよ、効率が悪いです、それに頑張りすぎて倒れちゃいます〜」

「すいません…」

「というわけで今から三十分程寝てください！」

ビシツと指をさす

「え!?!(´▽´)で?。」

「はい、ここです!今からでは時間的に家では寝れなさそうですし。まずこれを飲んでください」

そう言つてハーブティーを渡す

「飲んだら早く布団をかぶつて目を瞑つててください」

「え、けれどさすがにここでは…」

「つべこべ言わずさっさと飲んで寝てください、なんなら無理やり眠らせましょうか?」

そう私が威圧すると、はい!と気持ちいい返事をしてハーブティーを飲んだ。

「この布団を使つてください」

そう言つて布団を被せる

「じゃあ三十分後に起こしますね、おやすみなさい」

「おやすみなさい…」

そう言つてお客様はすぐに眠りについた

私はリラックス効果のある香りを出す花をベッドの近くに咲かせたあとキッチンへと向かった

さあ三十分以内にぴったりのブレンドを探さない!

「起きてくださ〜い三十分経ちましたよ〜」

そうお客様の耳元で言つてあげると、バツと体を起こした

「今何時!」

「大丈夫ですよ〜あれから三十分しか経つてませんから〜」

「そうですか」

「では、お仕事に行つてらっしゃいませ〜と言いたいのですが、ご飯食べていきますか?」

「あ、いえ食べてきたので大丈夫です」

「そうですか〜それじゃこれだけ食べてください」

そう言つて草団子を渡す

「これは?」

「私が作った草団子ですよ〜植物でとれる栄養素はだいたい網羅して

ます！これ食べてれば栄養のバランスは崩れないはずです！いつもこれを食べてれば体を壊すことはありませんよ、あと毎食これ飲んでください」

そう言ってブレンドした葉が入った袋を渡す。

「これは栄養素を体に吸収しやすくする効能のあるハーブティーの葉です、これは食事と一緒に飲んで下さい、で次はこれです」

私は他の袋をお客様に渡す

「これは寝る前に飲んで下さい、眠りの質をあげてくれます。さつき飲ませたハーブティーと同じものです、それで最後にこれを、これに關してはいつ飲んでもいいんですが仕事しているときに飲むべきですね、効能は集中力の上昇と疲労の蓄積の抑制です、けどこれは美味しく作れなかつたんです……時間がもつとあればどうにかなったかもしれません……」

「いや正直言つてここまでしてもらつていいのかと不安になるレベルなんですけど……」

「いや、駄目ですよ……美味しくないとハーブティーなんてハーブティーではありません！なので今日のお代はけっこうです、今からお仕事頑張つてきてくださいね」

「いやいや、ちゃんとお金は払わせてください、さすがにこれだけしてもらつてお金を払わないわけにはいきませんよー」

「けど……お客様にほとんど不良品みたいなもの渡していますし……」

「それで仕事の効率が上がるなら味なんてどうでもいいですよ！僕の悩みは美味しいハーブティーが飲みたいじゃなくて、彼女と会いたい事なんですよ、それを達成するためのハーブティーが美味しくないとらつてお金はいらないですつてのは理屈が通りませんよー」

「うう、あ、あくまで私は悩みを解消する手助けをしているだけなので絶対叶うとはいえませんよ……」

「じゃあー私が彼女と会えたら、お金を受け取つてください！いいですかー」

「うにゆくわかりましたよくもし悩みが解消されたら代金を受けとります、けれど解消されなかつたら代金は払わなくていいですから！」

私が出つと折れてそう言うとお客様はニコツと笑い

「じゃあ代金また払いにまた来ますね！」と言って店をあとにした。

少しブレンドを探すのに頑張りすぎましたね…

私も三十分位寝ようかなあ、店の前の看板を休憩中にしないとな、と店先に出てみると何人かの人が順番を待っていた…

んくもうちよつと頑張らないとですな…

その日、結局私が休めたのは日が沈んだ頃だった…

第二章 鉄の森

第五話 心竜の滅竜魔道士

「ルーシイさんって凄い人だったんですね!」

「え?急にどうしたの?」

「聞きましたよ!バルカンとゴリラのメイドさんを倒したんですよ!」

「それ私が倒した訳じゃないわよ…」

少しうんざりした顔でルーシイさんは答える。

「あれ?じゃあ牛とか蟹とかを倒したんですっけ?」

「牛と蟹は仲間のほう!」

「牛と蟹が仲間ですか!じゃあ動物の力を借りる能力ですか?」

「違うわよ、星霊魔法よ、ほら」

そう言って鍵を見せてくれる

「うわあ〜黄道十二門じゃないんですか〜なるほど牛と蟹ってそういうことでしたか〜ところでどうやって手にいれたんですか?」

「お母さんから受け取ったのよ…」

お母さん…ですか……

「他にはどんな鍵持ってるんですかあ〜?」

「黄道十二門だとアクエリアスとかかなあ」

「三つも持ってるんですか!ルーシイさん凄いですね〜」

「そう?ふふっそっか〜凄いかなあ〜」

ルーシイさん喜びすぎですよ〜と心の中で呟きつつ喜ぶルーシイさんを眺めていた。

そんな風楽しくお喋りしていると急に誰かが

「エルザが帰ってきた」と叫んだ。

「エルザって?」

「エルザさんはですねフェアリーテイルの中でもトップクラスの実力をもってるんです〜」

「へえ〜そんなに凄い人なんだ」

「あ、帰ってきましたよ〜って何か凄いもの持って帰ってきましたね…」

エルザさんは装飾が施してあるよく分からない角を持ちかえって
いた…

その角を置くやいなや、すぐに皆に注意をし始める

「風紀員か何かで…?」

「あはは、それはちよつと違いますよ〜」

注意し終わると、エルザさんはナツさんとグレイさんに対して急に
しつかりした面持ちで話始めた。

「ナツ、グレイ実は二人に頼みたいことがある、仕事先で少々やっかい
な話を耳にしてしまったな、二人の力を貸してほしい、ついてきてく
れるな。」

出発は明日だ、準備しておけ、詳しくは移動中に話す」

それだけ言うとエルザさんはギルドから立ち去った。

「へえ〜エルザさんとナツさんとグレイさんでチームですか〜」

絶対物が壊れる……」

「あ、ルーシィ」

ミラさんがルーシィさんに話しかける

「あの三人が組むのは素敵な事なんだけどね仲がギクシヤクしてると
ころが不安なのよねえ〜、ルーシィについてって仲を取り持ってくれる
?」

「え、私が!?!」

「たしかにナツさんと仲良いですしね」

「正直言うと私怖いんだけど…」

「あ、じゃあ私がついていきましようか?」

「本当!?!」

「どうせ暇ですし〜それにあの人たちほっておくとなに壊すかわかり
ませんし…」

というやり取りが昨日あり、私たちはマグノリア駅に集合し、列車
に乗り込んだ。

「ナツさくん大丈夫ですか？」

「はあはあ、うぷつ、きもちわるい……」

「きつそうですね……私も少しは乗り物酔いしますがナツさんは別格ですよね……何でなんですかね？」

「わかんねえ……うぷつ、てかサイカが双子に見える……」

「たしかに私は双子の姉がいますけど、となりにいるわけじゃないですよ」

「え、サイカって双子だったのか？」

「はい、そうですねよ、言つてませんでしたっけ？」

「私は始めて聞いたな」

「そうでしたっけ？ならこの際私の事話しましょうか？」

「私聞きたいな、ギルドに入つてまだ間もないから皆の事少しでも知りたいし」

「そうですね、まず私には双子の姉がいたんですよ、私達はある方に育ててもらったんですが七年前に急にいなくなつてしまつて」

「七年前！うぷつ」

「はい七年前です、急にいなくなつてしまい私達は途方にくれながら旅をしていました、すると同じく旅をしていた年上の男の子と同一年の女の子と出会つたんです。

その後しばらくは楽しく四人で旅をしていたのですが、ある時私とお姉ちゃんは二人が寝てる隙に闇ギルドの方に連れ去られてしまつたんです。

私達は牢屋に入れられ色々な事を教えられました、汚らわしい知識です……

捕まっている間も私達は脱出する方法を考え、何とかそれを実行にうつし逃げることに成功しました、ですが追いかけて来た方々に小屋の中に追い詰められ、お姉ちゃんは私を庇い目の前で闇ギルドの方に殺されてしまいました……

私は町の方までがむしゃらに走り町まで逃げたのですがそこで力尽き倒れていたところを植物ぽいおじいちゃんに助けられました。

その方に魔法の稽古までしてもらったんです。

そうして私が今くらいまで魔法が使えるようになった時フェアリーテイルを紹介してくれたんです、そうして今に至るといふ感じですよ」

「サイカにそんな過去が…」

「サイカもし何かあれば私やギルドの皆に言え、力になる」

「そうだよ、サイカが寂しいときは私がついてあげるといふし、家隣だしね」

皆さんがニコニコしながら私を見つめる

「ふふっ、言われなくても何かあれば助けを求めますよ、何も無い方がいいんですけどね…それに私は寂しくありませんよ！皆さんがいますし、それにお姉ちゃんも私の中で生き続けていますし…」

「サイカが寂しくって言うならそれでいいんだけどね」(記憶があればその人は心の中では生き続けているみたいなき感じかしら？サイカって案外ロマンチックなことなのね…)

「あ、話してたら着いたみたいですよ、駅」

私達は荷物を持ち列車から降り簡単にエルザさんから今回ここまで来た理由を聞く。

まあ要はララバイとか言う危ない魔法をもってる鉄アイゼンヴァルトの森なる闇ギルドに乗り込むらしいです……

危険ですね…

「てゆうかナツさんいけませんよ!？」

「何と言う事だ！ナツを列車においてきてしまうとは」

エルザさんはそう言うやいなや、駅員に列車をとめるようにお願い、いや命令？強迫？している…

「ハッピー頼んだ」

エルザさんがそう言うのとハッピーが緊急停止のレバーを下げた…やり過ぎ…

「ナツのためだ仕方ない、よしそこにある魔動四輪車を使わせてもらおう」

仕方ないって…けどここまでするとエルザさん話を聞かないから

なあ……言うとおりにしておこう……

「おい、早く乗れ！ナツを追いかけろぞ！」

「はあくいつもこんな感じになるわね……」

文句を言いつつもルーシーさんは魔道四輪車に乗り込む。

「サイカ、さっきの話で少し気になる場所があったんだがいいか？」

グレイさんは少し気まづそうに聞いてきた。

「良いですよ私が答えれる事ならいくらでも答えますよ」

「思い出させるようで悪いんだが、何でサイカ達は闇ギルドに拐われたんだ？」

「え、えつとですね……私が特殊な魔法を使うからですよ……」

「特殊な魔法って植物を操る魔法か？」

「いえ、違います、植物を使う魔法と同じ魔法ではあるのですが使い方が全然違うんです、ほとんど別の魔法って言ってもいいくらいに」

「具体的にはどんな魔法なんだ？」

私はその問いに困惑する、答えてもいいんだろうか？そうやって私が返答をしないでいると

「言いたくないなら言わなくてもいいぞ、話したいときに話してくれればいい」

そうグレイさんが言ってくれた。

「いえ、前々から話さないとは思ってたんです、けれどこの話を聞くと闇ギルドに狙われる可能性がありますけどそれでも聞きますか？」

恐る恐る私は聞く。

その問いかけに皆さんは大丈夫だと答えてくれる、ルーシーさんは少し怖がってたけど……

「まず私は実は心竜ドラゴンスレイヤーの滅竜魔道士なんです」

その言葉に皆さんは少しだけ驚く、ルーシーさんは大分驚いていたけど……

「ナツと同じ滅竜魔法かたしかに珍しい魔法だな」

「てことはサイカもドラゴンに育てられたのか？」

「はい、私はナツさんが育ててもらったドラグニルさんではなく心竜

アルカナハートに育ててもらったんです、まあ七年前に急にいなくなってしまうんですけどね……」

「そこまで一緒なのか……」

「けれど私は滅竜魔道士だから狙われたと言うわけではないんですけどね……」

と話しているとナツさんが乗っている列車が見えてきた。

「あ、ナツさんの乗ってる列車が見えてきましたね」

そう言っただけで列車を見ていると急に窓からナツさんが飛び出してきた!?

私はすぐに花を咲かせクッションがわりにしてナツさんをキヤッチする

「大丈夫ですか、ナツさん？」

「ん？ああ、大丈夫だ」

「ふう、良かったくそれよりもなんで窓から？」

私がそう聞くとナツさんはアイゼンヴァルトの人と少し喧嘩をし、そいつがおかしな笛を持っていたと教えてくれる、とりあえず私達はその人を追うため、魔動四輪に乗り列車を追いかけた

「ララバイって多分その笛なんだよね、それじゃあヤバいかもしれない、それ集団呪殺魔法だよ！笛の音を聞くだけで死んでしまう恐ろしい魔法！」

ルーシイさんが車内で大きな声をあげる

「そんな魔法あるんですか!？」

「そんな魔法がエリゴールの手になんかにもしも渡ったら！急ぐぞ！」

エルザさんが急に速度を上げる

「エルザさんいくらなんでもとばしすぎです！魔力が切れますよ！」

「そんな事言ってる場合ではない！」

「ううう」

「やめとけサイカ、エルザがこうなったら聞かねえよ」

「はあくそうですね……」

エルザさんが無理したことにより私達は比較的早くに駅に着いた

駅は何故かアイゼンヴァルトに占拠されており、軍隊まで出ていた様子を見るに返り討ちにあつたようだった。

「軍隊の方々をあんなに傷だらけにして……許せませんね……」

「この中に闇ギルドがいるのね……」

少し怖がっているルーシーさんの手を取る

「皆さんもいるし大丈夫ですよ」

そう言うところシーさんは少しだけ安心してくれた様だった。

「ありがとね、サイカ」

「きつと皆さんが無双して下さいますよ!」

「ふふ、確かにそれはありそうね」

「それでもいざという時に戦うために気だけは引き締めておきましょう!」

エルザさんを先頭に駅に入る、中にはアイゼンヴァルトの方がたくさん集まっておりぱつと見るだけでもかなりの数がある。

これを全て相手すると思うと少し骨が折れそうだ…

そんな中何故か空をふわふわ飛んでいる人が1人、多分あの方がエリゴールという方なのだろう。

「エリゴール! 貴様ララバイで何をするつもりだ!」

「今この駅の周りには野次馬がたくさん集まっているよなあ」

そう言いつつコツンとアナウンスをするための放送器をこづく

「エリゴール貴様ララバイを放送する気か!」

それを聞くとエリゴールはふはははと笑い窓から出ていった

「ナツ、グレイ、サイカは三人で奴を追うんだ三人いればエリゴールにだって負ける訳がない! 早く行け!」

それを聞くとナツさんとグレイさんは走り出した

「どうしたサイカ、お前もエリゴールを早く追え!」

「嫌です!」

「サイカがエルザに反抗してる!?! サイカ、やめといた方がいいよ……」

かなりびくびくしながらハッピーさんが言う。

「やめません、エルザさんは魔動四輪をとばしてかなり魔力を消費しています、休憩すべきです!」

「私は大丈夫だ！だから早くエリゴールを「大丈夫じゃないです！私は何を言われても追いかけませんからね！エルザさんは休憩もかねて駅の周りにいる人の避難誘導をしてください！」

「だが…早く!!エリゴールさんの方はあの2人がいればきつと大丈夫です!!」

そこまで言うとうエルザさんも折れてくれたようで私にこの場を任せてくれた。

「ルーシイさんも手伝ってくださいね、私だけだとしんどいかもですし」

「え、私も!」

「お願いしますね!じゃあ、少し頑張りましょうか!」

そう言うてアイゼンヴァルトの皆さんの方を向く。

「女二人で何ができるんだか、取っ捕まえて売っちまおうか!」

「オイラもいるよ!!」

頭数に入れられていない可哀想な猫の声が聞こえる……

「下劣ですね……汚らわしいです……」

少しは花のように綺麗であって欲しいものですよ…ポイズンガー
デーン!」

そう言うてアイゼンヴァルトの人達の足下にとても綺麗な花畑が
広がる

「わあ〜綺麗!」

とルーシイさんから歓声上がる

対して闇ギルド方々は

「花を咲かせたところで何の意味があるんだよ」

等と言いながら花を踏み潰す。

「花を踏み潰すなんて酷いことしますね……花も怒ってますよ……」

「花が怒ってるだあ、花の声でもてめえにはききよえてりゆつての
かあ?ん?」

急に闇ギルドの方の呂律がまわらなくなってきた。

「実はですね、その花、通常時でも毒を出すんですけどね、茎を折ると
大量に毒を出すんですよ」

少し吸うだけでも結構効果がありました、最初は呂律がまわらなくなり、次は平衡感覚に異常をきたします、そして最後には全身が麻痺します。綺麗な花には毒があるって言葉知りませんでしたか？」

そう言っている間にもアイゼンヴァルトの方はパタパタと倒れていく

「くそ！おい早くあいつをぶつとばせ！そうすりやこの花も消えるはずだ！」

そう言うとき私の方へ向かってたくさんの方が走ってくる

「まだ少し多いですね、それじゃこの花にしようかな！」

そう言いつつ駅のホールの真ん中に天井に届きそうな程大きな花を咲かせる。

「ルーシイさん、ハッピーのこと押さえといてください！」

「何でおいらが!？」

「私の魔法にハッピー巻き込みたくないし、よろしくお願いしますね」

「オツケーわかったわ」

私は闇ギルドの方の攻撃を避けて時間を稼ぐ、毒を吸ったこともあり相手の動きは遅く、避け続けるのはあまり難しくはなかった。

時間が経つ毎に少しずつ私に攻撃をしようとする人は少なくなり、遂には誰もがホールの真ん中に咲かせた花に近づいていった。

「はうく避けるの疲れました」

「ちよつとサイカ、これどういう状況なの！ハッピーもあの花に近づきたいって暴れるし」

「ハッピーこれ飲んで」

そう言いつつ小瓶に入った液体を飲ませる、するとすぐに正気に戻ったようでオイラ何してたんだっけ？と不思議そうな顔をしていた。

「えつとですねあの花が原因でハッピーはちよつとおかしくなってます」

「あれ出したのサイカだよ」

「ごめんねハッピー、けどこの方法が一番楽だったんだ、あの花【魅了花】って言いつつ今回咲かせたのは男性が好きな匂いを出して引き寄せ

る花なの」

「あれ見ると好きとかいうレベルを越えてる気がするんだけど…」

アイゼンヴァルトの方達は

「何ていい匂いなんだもつと近くでーもつと近くで嗅いでいたい！何かしないといけなかったような気がするけど、そんなのどうでもいいもつと、もつと」

等と呟いている

「あれはですね、私が独自の改良を加えた品種で、匂いの効力をあげてるんです」

「たしかに花で戦意喪失させるのはいいんだけどあれどうするの？ほっておく気？」

「いえいえ、仕上げがありますよ〜クーちゃん！」

そう言うのと周りにいた人を魅了花もろとも呑み込むようにばかりかい花が咲いた。

「な、なにこれ！でかすぎでしょ！」

「クーちゃんで一網打尽なのです〜ちなみにクーちゃんは人を食べません、あくまで主食は魔力です」

「今食べたように見えただけど」

「魔力を吸ったら吐き出すので大丈夫ですよ〜魔力も半日動けなくなる程度しか吸いませんで死にもしません！というわけでクーちゃんには任せて私達はエリゴールさんを探しましょう〜」

「サイカってこんなに強かったのね……あんな人数を簡単に……」

「あはは、私なんてまだまだですよ、さつきも一人逃がしてしまいましたし……」

「いつの間に!？」

「魅了花を咲かせる少し前ですよ、その人も一緒に探さないとですね……」

あれ？何だか入り口の所おかしくありませんか？」

「なにこれ!？壁?いや、これ風だわ」

「閉じ込められたみたいですよ……」

早く皆さんと合流した方がよさそうですね……」

「あ、ナツさんの居場所が分かりました！」

「何でそんなことわかるの？」

「荒々しい心の気配がしたので〜」

「どういう意味かわかんないなあ……」

「まあ詳しくはまた話しますよ、今は早く合流しないと！」

そう言っただけで私達はナツさんがいるであろう場所に向かって走った、けれどその場所には私が逃がしてしまった一人にナツさんが掴みかかっていたり、エルザさんが怪我をしたアイゼンヴァルトの人を介抱しているというよく分からない光景が広がっていた。

「お、お邪魔だったかしら……」

「かもしれないね……」

第六話 妖精

「エルザさん、その方は？」

「今この駅を取り囲んでる魔風壁を解除出来る解除魔道士なんだ！だがアイゼンヴァルトの仲間(デイスベラー)に刺されて……」

「包帯探してきます！エルザさんはその人の意識が途切れないうる声をかけ続けてください！」

多分包帯は駅員室にあるだろう、幸い駅員室はすぐそこだ、そこから包帯を借りればいい。

私は急いで駅員室に入り包帯を見つけた、私はすぐに服を脱ぎあの人(デイスベラー)が怪我をしていた場所に包帯を巻き、急いでエルザさんの所に向かう。

「包帯見つけて来ましたよ！まだその人の意識はありますか？」

「ああ大丈夫だ、まだ意識はある」

私はすぐにその人に駆け寄り話しかける

「聞こえてますか？私が今からあなたの治療をしますが問題ありませんよね」

「何で：俺なんかを助けるんだ？」

「人が死ぬところなんてもう見たくないですから……」

「俺はお前たちの敵なんだぞ」

「そんなことどうでもいいですよ、それで私は治療してもいいんでしょうか？」

「はっお人好しが……」

それを肯定と受け取った私は魔法を使う、するとみるうちに傷口が塞がっていき遂にはきれいさっぱり消え去った。

「ふう治療終了です！」

「サイカって治療まで出来るのね」

ルーシイさんが驚いている。

「サイカよくやった！」

そう言つてエルザさんが私をガシツと掴む。

痛つと声を出した私にエルザさんがどうした、大丈夫かと聞いてく

る

「いや、さっきの戦いで少し怪我をしまして、今掴まれた時に少し痛かっただけです」

「ああ、それはすまなかった、怪我は大丈夫なのか？」

「たいした怪我ではないので大丈夫ですよ」

するとルーシイさんが不思議そうに声をかけてきた。

「いつの間にサイカ怪我してたの？」

「えっと：ルーシイさんがハッピーを押さえるのに必死になってる時ですよ」

「そうなんだ：？」

「それよりも早く魔風壁を解除しろ！」

エルザさんが剣を向けて脅す。

「そんな脅しで俺がお前たちの言うことでも聞くとても？」

「本当に切るぞ」

「エルザさん、やめてあげてください、私解除の魔法も使えますから、私に任せてください！」

「な、サイカは治癒に加えて解除魔法まで使えるのか」

「だからその人を離してあげてください、私がまた治療するはめになるじゃないですか」

「サイカ、お前解除の魔法使えるなら何でもっと早くに言わなかったんだよ」

「言うタイミングがなかったからですよ、さあそれよりも早く魔風壁を解除しに行きましょう」

そう言つてアイゼンヴァルトの方の手をとり魔風壁が見える場所まで向かった

「ちよつ、何で俺を連れてくんだよ！」

急に走り出したサイカ達に遅れをとった他の四人は走りながら話し合う

「何でサイカはあいつを連れてつたんだ？」

「さあ、けどサイカにも何か考えがあるんじゃないか？」

「それよりもサイカって色んな魔法使えんだな！」

「ロストスペルである治癒魔法、それに解除魔法、まで使えるとは驚きだ」

「それに植物の魔法、あれも凄かったよ、あ、ほら、ここからホール見えるでしょ」

そう言つてルーシイがクーちゃんを指差す

「な！なんじゃありや！」

グレイとナツが同時に叫ぶ

「あれはたしかに凄いな……」

「でかすぎだろ！サイカってそんなに強かったのか！後で勝負してくんねえかなー！」

「やめとけ、やめとけ、お前いつつもギルドで眠らされてるじゃねえか」

「なんだとグレイ！ぶつとばすぞ！」

「やめないかナツ！今は喧嘩してる場合じゃない！」

「お、おう……」

「あ、サイカいたよ！おくいサイカ」

その言葉にサイカは気づいたようので振り返り手をふった

「あ、皆さん！ちょうどよかったです！魔風壁、今とけますからしくじやあいきますよ」

そう言つて私が魔風壁に手を添えるとすぐに風が晴れ遠くの景色まで見渡せるようになった

「ふうく成功です、じゃあ早くエリゴールの所に……」

そこまで言う私の足に力が入らなくなり後ろに倒れてしまい、ろくな受け身もとれずに背中を打ち付け鈍い痛みが走る

「大丈夫!？」

「大丈夫ですよ、少し魔力を使いすぎちゃったみたいです、エリゴールさんの方は任せて良いですか？今の私が行っても役に立てなさそうですし……」

「そうかわかった、ルーシイ、サイカを家まで送つてやつてくれ」

「わかったわ、サイカ立てる?」

「大丈夫ですよ、一人で帰れますから、皆さんはエリゴールを追ってください」

そう言って立とうとするが、力が入らずまた倒れそうになったところをルーシイさんが支えてくれた

「大丈夫じゃないじゃないの!ほら、家まで送るから」

「うう…じゃあルーシイさんのお言葉に甘えさせてもらいます…」

と不本意ながら私は答えた

「それじゃあルーシイ、サイカのこととは頼んだぞ、エリゴールのことは私達に任せておけ、サイカはきちんと休憩するんだぞ!」

「はい、わかってますよ、それよりもナツさんとハッピーと一緒に先にいっっちゃってますよ」

「なっあいつら!いくぞ 그레이、早くナツ達を追いかけるぞ!」

そう言うとすぐに二人は行ってしまった

「忙しなくてすね〜ルーシイさん、いやカゲさん、すみませんけどクーちゃんの所に連れていってもらえます?」

「何で俺が!それに親しげに名前を呼ぶな」

「もし、私が治療したことに少しでも感謝してるなら運んでくださいよ〜」

「お前が勝手に助けただけだろ」

「はあ、そうですか…それとこれからは罪を償っていくんですよ?」

「はあ?冗談じゃねえ何で俺が捕まらないといけないんだよ!」

「反省の色も無しですか…」

やっぱり闇ギルドはクズだらけですね…もういいですから寝てください」

そう言って睡眠作用のある花粉を出す花を口元に張りつける。

カゲさんは外そうと花を引っ張るが全くとれる気配はない、それならと魔法を使おうとしたようだがカゲさんの魔法が発動することはなく、そのまま眠りに落ちていった。

私はカゲさんの近くまで行き

「お借りしたものは返しますね、あとあのギルドについての情報あり

がとうございしました」

そう言つて手を握ると、その場を離れルーシイの方へ向かった
「サイカ辛そうね、おぶろうか?」

ふらふらと足元がおぼつかない様子の私に声をかけてくれる

「お願いしても良いですか、大分きついです……」

ヨイシヨと私をルーシイさんが背負う

「ところでサイカがカゲつてやつから借りてたものって何なの?」

「ルーシイさん、絶対誰にも言わないって約束できます? もちろんナツさんとかにも言つては駄目です、言うときは私が言いますから」

「わかったわ……」

「えっと、私が心の滅竜魔道士なのは言いましたよね」

「ここに来る前に教えてくれたわね」

「心の滅竜魔法には大きく分けて二種類あるんです、一つは自分の心情で効力が変化する基本攻撃用の魔法でお姉ちゃんが得意としてました、もう一つは私が使つてる魔法で心を通わせる魔法なんです」

「滅竜魔法つて二種類あつたりするのね」

「他の方のはわかりませんが、私達は双子で得意な魔法がわかれてしまったので別々のものを教えてもらつたんです」

「そうなんだ」

「私の魔法は詳しく言うと、心を通わせることで心を通わせた人と色々なものを貸し借りしたり、あげたり貰ったり、交換したり出来るんです。例えばですね、今ルーシイさんに私の筋力を貸しました」
「あ、ほんとだ、少し楽になった! 他にはどんなものを貸したり出来るの?」

「感情や思考、記憶に人格、それに魔法も対象ですよ」

「え!? それつてサイカが私の魔法を使つたりも出来るつてこと?」

「鍵と魔法を貸してさえもらえたら使えますよくちなみにそれするとルーシイさんは私が魔法を借りてる間はいくら鍵があつても魔法は使えないですよ」

「その魔法つて強すぎない!」

「使い方によってはどんな魔法でも使える化け物が産まれます、なの

でこの魔法は絶対悪用してはいけませんよ、まあこの魔法は闇ギルドからしたら喉から手が出るほど欲しいんですけどね。あ、ちなみに私自身は他の魔法使えないので闇ギルドが私を狙う必要は100%この魔法なんですよね……」

「ん？サイカが使える魔法がそれだけってことは植物とか解除とか治癒の魔法は？」

「ああ植物は心を通わせて力を借りてるだけです、成長の促進を助けたりはしますけどね、やり方はギルドに入る前おじいちゃんに教えてもらいました。」

解除の魔法はカゲさんから借りただけですし、治癒に関してはその人の怪我を私が請け負ってるだけです」

「え!?!じゃあ今サイカは!?!」

「背中がとんでもなくいたいですね」

私は笑いながら言う

「笑い事じゃないでしょ！何でそんな無茶するの！早く病院に連れてかないと」

「大丈夫ですよルーシイさん、病院より先にクーちゃんのところに連れてってください、そうすれば傷もどうにか出来ますから」

「本当、クーちゃんって治療もできるの!?!」

「いやいや、あくまでクーちゃんの所に行くのは魔力の供給のためですよ、すみませんがルーシイさん少し急いでもらっても良いですか？そろそろヤバイです……」

「え、何が？」

「さっき背中を打ちつけた時から傷口から出血してるんです……」

「もうちよっと待って！」

もうすぐつくから！絶対クーちゃんのところに連れてってあげるから、死なせたりなんてしないから！」

ルーシイさんやっぱ優しいなあ

「少しだけ寝ますね、クーちゃんのとこに着いたら起こしてください……」

「サイカ！寝ちゃだめ！」

「あはは、大丈夫ですよ、寝たら良くなりますから、それでは後はお願
いしますね…」

ルーシイさんの背中温かいなあ、これならぐっすり眠れそう……

「サイカ、サイカ！起きてー！」

その声を聞き私は目を覚ます

「良かった、起きてくれて良かった……クーちゃんのところに着いた
のよ」

背中 of 怪我は少しだけではあるがましにはなっているようだった、
リラックスして眠ったからだろう

「おはようございます、ルーシイさん、ここまで運んでくださってあり
がとうございます、寝たことで少し良くなりました」

「本当に心配したんだからね！死んじゃったのかと怖かったんだから
……」

「心配かけてすいませんでした」

私は頭を下げる

「それで、魔力の供給するんでしょ」

「はい、じゃあクーちゃんそろそろ闇ギルドの方々出してあげて」

クーちゃんがそれを聞くとペツペツと闇ギルドの方を吐き出して
いった。

吐き出し終えたクーちゃんに

「吸った魔力をちよつと私にもわけて」

というと鳶を私の前までのぼしてくれる

「ふふ、じゃあいただきまあ〜す」

そう言うとは私はクーちゃんの鳶をくわえ蜜を吸いだす

「サイカ何やってるの？」

少し驚いているルーシイさんが聞く

「はひっへはひよひゆひようひゆうへふよ（何って魔力供給ですよ）」

「いや、何言ってるかわからない……」

「おいひいへふよ〜（美味しいですよ〜）」

「うん、わかんない」

「ひよっほはっへふははいへ〜（ちよつと待つてくださいね〜）」

「ぶはっ、ちよつとさまです〜、クーちゃんの蜜はいつも美味しいですね〜」

「サイカ、説明してもらえますか？」

「はい！クーちゃんの蜜には吸いとった魔力がとけてるんです〜蜜を普通にわけてもらう方法もあるんですが早く欲しいときはさつきみたいに蔦から吸わせてもらうんです〜」

「ふーん、クーちゃんって凄いのね、魔力を回復することが出来る蜜って凄く便利だと思うわ」

「時間が経つと蜜の中の魔力が空気にとけるので持ち運びは出来ませんよ」

「ん〜持ち運びは出来ないんだ、それよりも背中の怪我はどうなの？」

「魔力も回復したので少し寝れば治りますよ〜」

「いや、寝てれば治るって少し無理があるでしょ」

「そんなことないです、すぐに治りますよ、じゃあ私は寝ることにします〜」

「え!?!ここで寝るの!?!床にでも寝そべる気!?!」

「あはは、そんなわけないですよ〜」

そう言つて花のベッドを咲かせる

「それではおやすみなさい」

「ちよつとクーちゃんそのままなの!?!」

「はわわ、そうでした」

私はクーちゃんに触れて手のひらサイズまで縮め肩にのせる

「ルーシイさんも一緒に寝ますか？」

「私はいいわよ、こんなところでは寝たくないし、」

「そうですか〜それじゃ私は寝ますね、おやすみなさい〜」

私はバフンとベッドに倒れこむ。

ふかふかしてますますそれにいい香りが……あ、すぐに眠気が……

まわりが騒がしくなり私は目を覚ます、ムクツと体を起こし伸びをする、寝ぼけ眼を擦りながらまわりを見渡すと、何故か記者さんや駅員さんがベッドを囲んでいた

「なんのようですかあ？」

「この駅を占拠していた闇ギルドがそこにのびていたんだけど、それは君がやったのかい？」

「はい、私ですよ、ふあゝ」

あくびをしながら答える

「君も魔道士なのかい？」

「はい、フェアリーテイルの魔道士ですよ」

「少しづつ頭がはたらくようになり、なぜ今の状況になっているのか気になった」

「あれ？そう言えば金髪の女の人と一緒にはいませんでしたか？」

「その子なら駅入り口辺りにいるよ」

「そう言っただけで記者さんが指をさす」

「ありがとうございます！記者さん！」

私はこれで帰りますので！

「あ、記事は自由に書いてもいいんですけど私の写真はのせないでくださいね」

「そこだけはよろしくお願いします！」

「そう言うときは急いでルーシーさんのところへ向かった。」

「ルーシーさん、すいません寝すぎました！」

「あ、サイカ体は大丈夫なの？」

「もうふさがったみたいですよ」

「それはなんの魔法？」

「お姉ちゃんとも心を通わせてたつてことですよ」

「え、どうゆういみ？」

「どうゆういみでしょうね」

「またお話ししますね！」

「それより何で私の周りに記者さんとかがいたんでしょう？」

「そりゃあ闇ギルドが占拠していた場所で寝てる人がいれば気になるでしょ」

「たしかに……」

その日私達は家に帰ったのだが次の日ある事件が起きた

次の日発売した週刊ソーサラ（通称週ソラ）に私の事が書いてあったのだ

『フェアリーテイルには本物の妖精がいた！』等という内容だった……

「これ、サイカのことよね…」

「うううたしかにどんなこと書いてもいいとは言いましたが、これはないですね……」

多分服に魅了花の香りが染み付いていたせいでしょうけど、この記事はきついですね……」

「まだ、化け物とかいわれないだけいいんじゃないの？」

「それでも妖精は恥ずかしいです…それに駅長さんが私にお礼が言いたいとかいってますし…」

これまた行かないといけない感じのやつですよね…

行きたくないんですけど……」

「置いてきた花のベッドどうするの？」

「それが一番気がかりなんですよね……」

こっそり回収にいかうかな」

「サイカ、朝から元気ないねどうしたんだい？」

「ああカナさんですか、実はこの記事が……」

「あつはつはつ、サイカが妖精か、いいんじゃないの、可愛いじゃんか！」

「よくないです！私すっごく恥ずかしいんですからね！」

『別に良いじゃん、サイカほわほわしてるし妖精って例えあつてるじゃん』

私の頭の中に声が響く

『ほわほわしてないもん！きっちりしてるよ！』

『いやいや、それならこの前のチンピラの術式にかからないでしょ』

あの時の事が脳裏に浮かぶ

『ううお姉ちゃんひどいよー思い出さないようにしてたのに』

『妖精って呼ばれるのなんてあれがバレるよりましでしょ？』

『たしかにそうだけど』

『じゃあ良いじゃんか、まだましなほうだよ』

『まあそうだね、うじうじ言っても意味無いしね、ふふっありがとお姉ちゃん』

『別にたいしたことしてないよ、じゃあまたな』

『またねお姉ちゃん!』

「おおい、サイカ?聞こえてる?」

ぶんぶんとカナさんが私の前で手を振っている。

「ん?なんですかカナさん」

「いや急に反応しなくなったからどうしたのかと思って」

「あ、すいません考え事してました、それじゃ私は花のベッドを回収しに駅に行つてきますね」

「え!?!急にどうしたの、さっきまであんなにいやがってたのに!」

「心変わりですよ」

「そっか……?」

私はその後、駅でお礼を貰ったり花のベッドを回収したのだがその事も小さくではあるが次の週の週ソラにのつていたことにまたサイカはううくと唸っていた

第七話 心の滅竜魔法

それは突然のことだった

「え!? ナツさんとハッピーがルーシイさんを連れてS級クエストに行っただってほんとですか!!」

私はその事実を知ったのは昼過ぎのことだった

「グレイが連れ戻すために追いかけたんだけど、今連絡すらつかないのよ……」

「グレイさんもついていったか、無理矢理連れてかれたかのどっちかでしようね」

「私もそう思うわ」

「エルザさんは今何してるんですか?」

「今仕事に行つてて連絡がとれないのよ、連絡とれ次第向かってもらおうとは思ってるんだけどね」

「そうですか……」

「そうだ! サイカが連れ帰ってくれない? サイカならナツを止められるでしょ」

「え!? 私がですか!」

「今頼めるのはサイカしかないの!」

「……わかりました正直絶対連れて帰るなんて言えませんが頑張ってみます!」

私はそう言ってギルドを出て港がある町の駅まで来たのはいいんだけど……

誰かにつけられている気がする……

今ここでつけてきている人に声をかけて戦闘にでもなったら周りの人に迷惑がかかるかもしれない、そう思った私は人通りの少ない路地に向かった

私とは違う靴音が後ろから聞こえる、やっぱりつけられている!

ここまで来たらいいだろうと思いきや振り返ろうとした時「サイカ」と後ろから、私をつけていた人の方から聞こえてきた。

私はその声を知っている……

いつもの頭に響く声じゃない、けれどあり得ないはずお姉ちゃんは……

「サイカ」また声が聞こえる、聞き間違えはあり得ないお姉ちゃんだ！
でもなんで？

今私の後ろにお姉ちゃんが？

『サイカ！』その時頭の中に声が響く、その声ではつと我にかえった時、急に布を口にあてられた。

ちようど息をすうタイミングであてられたことにより、大分布についていた香りを嗅いでしまう。

ヤバイ、これ嗅いじやだめなやつだ……かなり吸っちゃったし……頭クラクラする……体に力入らないし……意識も……お姉ちゃん……クーちゃん……後はお願ひ……

目を覚ますと案の定私は牢屋の中にいた。

やっぱりあのクズか……

「おお、やつと気づいたか、懐かしいだろこの牢屋は」
クズが話しかけてくる

「話しかけないで」

「そっけないねえ、そういや昔も君は俺と話してくれなかったな、お姉ちゃんの後ろで小動物みたいに震えてたっけ」

「話しかけないで」

思い出したくもない昔の記憶がよみがえる……

「おや、どうしたんだい？怖くなつて震えてるのかな？」

「う、うるさい話しかけないで」

「はっはっ、怖がらなくてもいいよ、別に俺は君に何かしようって訳じゃねえ、もし何かするとしても昔にやらせたことくらいだよ」

気持ちの悪い笑みを浮かべながら私に話しかける

「気持ち悪いです」

「はっはっ、そんなこと言われるとおじさん傷つくなあ、そんなこと言わないでよ妖精ちゃん」

「やっぱりあの記事ですか」

「写真は出さないようにしていたのは賢いが名前も出さないようにすべきだったな、サイカ」

「私の名前なんて覚えてたんですね……」

「そりや覚えてるよいい商売道具なんだからよ、お前の魔法は高く売れる、なんせどんな魔法でも使えるようになるそんなでもない代物なんだからな」

「その魔法が使える私にこんなことしてただですむとでも？」

「サイカも気づいてるだろうがその手錠には魔法を封じる効果がある、だからそれさえはずさなけりや怖くなんかねえってことだ」

「わかってますよ、だからもしこの手錠が外れたときはおぼえておいてくださいね」

「その手錠が外れる頃にはお前は誰かに買われてる時だよ！」

「それまでにきつと誰かが助けてくれますので」

「はっ無理だね、ここはうちのギルドのメンバーとお前しか知らねえ、いやいちようエマも知ってるのか」

「てめえみたいなクズやろうがお姉ちゃんの名前を呼ぶな！」

「ほう、俺様にこの状況で命令するか、いい度胸だな」

クズが私の脇腹を蹴りあげ、私は吹き飛び牢屋の壁に叩きつけられた

「ぐふっ」

一気に肺の中の空気が吐き出される

「はっ、昔やってたこと色々やってやるよ」

そう言う私の体に電流が走った。

痛い、痛い、痛い

「ちよつとやり過ぎたか？俺の魔法の威力も上がってつからちよつとは加減もしてやらないとなあ」

そう言いながらも私への魔法の威力を上げる

うう……痛い……怖い……嫌だ……昔みたいに私の事をこいつが……暴力だけじゃないはず、昔みたいにこいつに奉仕を……うっ早く助けて……お姉ちゃん……

早く助けないと！

じゃないとサイカが！

けどこの身体動きづらいんだよな、いや別にクーちゃんの事を貶してる訳じゃないんだよ。

もうちよつと動きやすいものなかったのかなあ？つて思っただけだよ。

まあサイカもかなりギリギリな状態だったし、あたしを切り離しただけでも上出来か。

とりあえず急いでギルドに戻らねえとな、サイカの危機的状況を誰かに伝えて助けてもらわねえとな。

クーちゃん今なんの種もってんだ？サイカが非常時のために持たせてるだろ、魅了花と催眠花かこれならどうかできそうだな。

あたしはまず魅了花を咲かせて男がよってくるのを待つ、あたしの人格をクーちゃんに渡したときにサイカの魔法も一緒に渡してくれていたことによりあたしでも問題なく花を咲かせることが出来る。

人通りの少ない路地だったがすぐに男の人が歩いて来た。

次にその人に催眠花の香りを嗅がせてフェアリーテイルに用事があるという暗示をかける、するとその人はとことことフェアリーテイルに歩き出すという作戦だ。

あたしはその人の鞆の中に滑り込み、フェアリーテイルにつくまで待つ、出来る限り早くサイカを助けないとあれが始まっちゃう、待てるよサイカ、急いで助けに行くからな！

「ははっ腕は落ちてないみたいだな、また一から教えないといけないかと思っただけ、逃げ出してからも何度もこういったことしてたのか？それとも身体が覚えてるってか！」

「おえっ」

気分が悪くなり牢屋の隅で嘔吐する、まだ口の中にあいつの味が……

「昔もそうやって吐いてたな、どうする？お前が反抗しないってんな

らむかしよりは待遇をよくしてやってもいいんだぜ」

「黙れ、クズ、てめえの言うことなんてきくくらいなら死んだ方がましだ」

「まだそんな減らず口がたたけるほど元気だったんだな」

「あなたはいつまでたつても変わりませんね、昔から自分よりも弱い状態の人に対しては高圧的なクズやろうで、私みたいな子供に欲情する変態やろうでしたね」

「お前、今の状況でよくそんな口の聞き方が出来るな！ちよつと痛い目みないとわかんねえようだな！」

「いいんですか？商品である私に傷がついたら価値が下がりますよ、男の喜ばせ方や奉仕の仕方を私に教えた意味がなくなってしまうですよ？」

「はっ、多少の傷があろうと無かろうとたいして値段は下がれねえよ、それにお前を買いたい奴らはお前の魔法に興味があるんだ、あくまでそういうことはおまけでしかないんだよ、お・ま・けだから俺はお前をいくらでも傷つけられるわけだ！」

クズが膝で私の顔を蹴りあげる、痛い、けどきつとお姉ちゃんが助けてくれるから大丈夫…クズの暴力なんて怖くもなんともない、死ぬことは絶対ないんだから大丈夫、お姉ちゃんならこれくらい頑として耐えたはずだ、なら私も耐えられるはず、大丈夫…大丈夫…

よし！ついた！

「あれ？僕なんでこんなところに？」

ここまで運んでくれてありがとね、それよりも早く助けをよばないと！

あたしはフェアリーテイルの中に入りカウンターのところにいるミラさんに触れて心に訴えかける

『サイカが大変なの助けて！』

「えっ誰!？」

『足下を見て!』

「足下?ん?あなたはクーちゃんかしら?今の声はあなたなの?」

『詳しくは違うけどそうよ!説明は後にして今は早くサイカを助けに!』

「わかったわ!とりあえずサイカに何があつたか教えてもらえる?」

「サイカが闇ギルドの奴らにさらわれたの、だから早く戦える魔道士を何人かむかわせて!」

「わかったわ、ロキ!カナ!」

そう言つてロキとカナをよぶ

「どうしたんだい?」

「サイカが闇ギルドにさらわれたみたいなの!」

「本当かい!?わかつたすぐ行くよ、けどどこに連れ去られたんだい?」

『私が案内する』

ロキさんの心に伝える

「ん?今の声は?」

「この子よ、サイカのクーちゃんっていう植物」

ミラが私の説明をしてくれるが少し間違っている、今は関係ないけど

「そうか、案内よろしくねクーちゃん」

『早く行きましょ!』

「そうだね、急がないと、じゃあ行つてくるねミラ」

「サイカをよろしくね!」

「任せといて!よしカナ行こうか」

カナはあまり理解できていないのかあ、ああと曖昧な返事をしてついできた、それもそうだろう私の声はカナには聞こえてないんだから、カナにはロキが一人で話しているように見えるんだろう

『急いで!じゃないとサイカがオークションにかけられる!』

「オークション!?何でサイカが!」

『説明は移動しながら時間のあるときにするわ、まず列車に乗って移動しましょ!』

「わかつた!まずは駅に行けばいいんだね」

待っててねサイカ！もうちよつとの辛抱だからね！もうすぐで助けに行けるから！

「おいサイカ、オークションの準備が出来たってよ、結局誰も助けに来なかったな！あ、そうだ声だけでも聞かせてやるか」

「サイカ」

お姉ちゃんの声が聞こえた

「おねえちゃん!?!」

「残念ながら録音ラクリマの声だぜ、エマの奴がお前を助けにこれるわけねえだろ、死んでんだからというかお前を助けにくるやつなんざ誰もいねえよ、ほらこれはてめえにくれてやるよ」

そう言つてクズが私にラクリマを投げてくる

「だいじょうぶ…だいじょうぶ…だれかがたすけにきてくれる…このてじょうさえはずればこんなやつころせるのに…ころせるのに…たえたら…ころせる…すぐころせる…」

「おつかないねえ」(ちよつとやり過ぎたか？精神がちよつといかれちまってるな、まあどうにかなんだろ)

「じゃあまた眠つてもらうからな」

そう言つてクズは私の口に布をあててきた。

「サイカの魔法が欲しい闇ギルドの奴らがオークションでサイカを競り落とす!?!」

魔法の事やサイカの今の状況をあらかた教えるとロキがすつとんきよような声で驚いた

「そうよ、サイカの魔法は闇ギルドの奴らは喉から手が出るほど欲しいものなの、それを本人ごと商品にするつもりなのよ」

あたしはペンで紙にすらすらと文字を書く

「だからオークション会場には闇ギルドの奴らが、しかもマスターが

わんさかいるはずよ」

「それはやばいね…」

「でしょ、だからオークション会場に連れてかれる前に連れ帰るの」

「わかったよ、サイカも魔法も闇ギルドの手にはわたらせないさ」

「いちよう魔法は大丈夫なのよ、サイカは念には念をつけてことで魔法もあたしに預けてるの」

「それじゃあ、闇ギルドの奴らがそれに気づいたら危ないんじゃない」

「多分大丈夫だとは思うわ、サイカは今魔法を封じられてると思うの、あいつらもあの魔法の強さは知ってるはずだから用心しているはずよ、それに昔一度サイカを捕まえてたんだからわざわざ魔法の確認までしていいと思うわ」

「そうか、魔法を封じてないと逃げられるから迂闊に確認も出来ないのか」

「見えてきた、あの建物よ」

私達はついたと同時に中に入り込む、しかし建物のなかはもぬけの殻だった。

くそ！オークション会場にもう行ってる！

サイカがいたであろう牢屋には吐瀉物とラクリマが落ちていた、吐瀉物があるってことはまたサイカに…

あたしがもつとすぐにこれれば！

怒りがこみ上げてくる、どうせ相手はあのクズだろう、それよりもすぐにオークション会場に向かわねえとサイカが！

あたしは落ちているラクリマを拾い上げ他の部屋を探している口キ達と合流しオークション会場へと急いだ。

「おい、起きろ」

頬を叩かれて私は目を覚ました、周りを見渡すかぎりここはステージのようだった、オークション会場だろうな予想をたてる、私の事をクズどもが興味津々に見ている、気分が悪い…

「さあさあ今回の商品はいつもの奴隷とは一味も二味も違います！皆さんも知つての通り、今回わたくしはあのちまたで話題の【請け負い】の魔法を持つている魔道士を捕らえることに成功いたしました！」
うおおと周りが湧く

「魔法はもちろんこの商品は容姿も別格！」

先日のアイゼンヴァルトの記事で紹介されていた妖精とはこれのことです！

記者が本物の妖精などと書くほどの可憐さ！

欠点としてはまだ幼いということですが、男の喜ばせ方や奉仕の仕方は教育済みです！なので他の奴隷と同様にお使いお使いいただけます。

魔法を取り出すだけで殺してもよし、魔法を奪い奴隷として使うもよしとそれは買った皆さんで好きにしてください！

それではそろそろ始めましょうか！まずは700万Jからスタートです！

「ちよつとまったあー！」

急に扉が開きロキさんとカナさんがあらわれた

「やっぱり助けに来てくれた、けどこの場で二人だけだと……」

今この場には闇ギルドのマスターがいっぱいいる二人だけだと……この手錠さえ外れれば私が、私が殺せるのに……そう思っているとつんつんと手の甲を触られた、私が手の方を見てみるとそこにはクーちゃんが、いや、お姉ちゃんが錠を持ってそこにいた

『サイカ、助けに来たよ、遅れてごめんね』

『大丈夫だよ、お姉ちゃん、早く手錠外して！私あいつら殺したくてうずうずしてるの！』

『ちよつとサイカ！落ち着きなさい、黒い感情にのまれちゃだめ！』

『ふふつ、私は大丈夫だよ私は冷静だからさくそれより早くしないと二人がやられちゃうよ！』

二人は攻撃に耐えるのがのがやつとといったところだった、それもそうだろう闇ギルドといってもギルドはギルド、その中のトップの間がごろごろここにはいるのだ二人だけではきついだらう

『早く外して〜今の私ならあんな奴ら皆殺しに出来るからさあ〜』
『殺しちやダメ!』

『何で〜? あんなクズども殺しちやった方がいいよ〜』

『だめ! それはダメなの! 相手がどれ程のクズだろうと殺してはダメ! あんただってわかってんでしょ!』

『わかんないよ〜なんであんな奴らがあんな奴らが生きてて、お姉ちゃんが殺されなきゃいけないの? わかんないよ……………』

けど、まあいつかそれよりも早く二人を助けないと! お姉ちゃんちやんと殺さないように手加減するから手錠外して〜』

『本当に誰も殺さないのね!』

『むう〜わかっているよ〜殺さない、少し痛い目はみてもらうけどね〜』

それを聞くとお姉ちゃんは手錠を外してくれる

「クーちゃんもありがとね、じゃあお姉ちゃんと魔法は返してね」

そう言っつてクーちゃんを縮めてポケットに入れ眠らせてあげる

「じゃあ早速始めよっかな〜お仕置きを!」

まずはやつぱり【心身接続】かなあ〜皆さんに私がうけた恐怖や痛みを何倍かにしてプレゼントします〜全身の震えが止まらないほどの恐怖を召し上がれ〜」

そう言々とクズどもの身体が震え始める何かに怯えるように、だが彼らは何に対する怯えなのかを理解できない、理解できないままただただ怯え続ける

「皆さんとの接続はもう終わってるのでまずは身体の自由を奪いましょうか〜」

怯えて逃げ出そうとしているもの、怯えながらも戦おうとするもの
そういった人々の身体がピタリと止まる

「あっはっはっ、逃がしませんよ〜それにガードもさせません、魔法も使わせません!」

私の魔法もろにくらってくださいね!

大丈夫ですよ、死にはしませんから〜死ぬほど苦しいですけどね〜
きやははっ!」

そう言っつて殺意などの黒い感情を魔力にかえて身体の中に溜め始

める

「歯食いしばってくださいね」

あ、食いしばれないんでしたね」

じゃあいきますよ」滅竜奥義・深淵の海原！」

私から高濃度の闇属性の魔力が放たれクズどもや周りの机や柱をついには建物までも飲み込んでいく、数分後私の魔法によっておきた土埃も収まり周りを見渡すとそこにはさつきまでの建物はみる影もなく、私とロキさんとカナさん、それに涙や鼻水で顔がぐしゃぐしゃになった闇ギルドの方々立ちながら気絶しているだけだった

「ロキさくん、カナさくん、大丈夫ですか？」

「大丈夫だけどサイカ、これって……」

「あはは、やり過ぎちゃいました」

あ、ちなみに黒い感情はある程度吐き出したので正気には戻りました」

本当、人様を嬉々として傷つけようとするなんて私は駄目な人間です
すね……」

もつとちゃんと制御出来るようにならないと」

「サイカは少し自分を責めすぎだと思うよ」

ロキさんが優しく言ってくれる

「サイカだつて色々大変だったんでしょ、それなら多少はやり返してもいいんじゃない？」

カナさんも優しくしてくれる

「まあ殺すのはやりすぎだと思うけれどね」

「わかってますよ……どんな方でも殺すのはいけないことです……」

「わかっているならそれでいいんじゃないの」

そう言つて頭を撫でてくれる

「はう……ところであの人達どうするんですか？つて一人いません！逃げられました！」

「嘘、じゃあまだこのへんに？」

「いえ、いないみたいです、もう遠くまで逃げてしまつたみたいです……多分その方大分強いですね、逃げてくれて良かったかもです、と

りあえずこの人達は評議院に受け渡ししましょうか」

私達はそのあと評議院に連絡し闇ギルドの方々をうけわたした、その際に色々聞かれたが私達は一部始終を話し解放された。

「すみません！色々二人には迷惑かけてしまつて」

「迷惑なんて思つてないよ、サイカのためなら僕はいつでも駆けつけるさー」

ロキさんがそんなことを言う、平常運転ですねえ

「ところで最後のあの魔法はなんだつたんだい？」

「あれは【深淵の海原】という心竜の滅竜奥義の一つです、闇属性の魔力で相手をおのみこみ、ダメージを与える魔法です。闇属性の魔力は精神的にも肉体的にもダメージを与えるんです、闇ギルドの方も精神の方にダメージを受けたんじゃないですかね…涙流してましたし…：幸い心が壊れてしまった人はいなかったみたいです…：けど壊れてもおかしくなかったと思います…：あの時の私はそこまで考えてたんでしょうか…」

「サイカはあの時の事覚えてないのかい？」

「ぼんやりとしか覚えてないんです…あの時は完全に黒い感情にのまれて暴走してましたから…：もつと精神面で強くないとです…：またこんなことがあつたときは暴走しないようにしないと…」

「あたしは今でもサイカは十分強い心を持つてると思うけどね、けど自分がまたオークションにかけられたりする時の事を想定するのがおかしいんだよ」

「そうですね…？」

「もうサイカが連れ去られるようなことはないわよ、約束する、あたし達が絶対守つてあげる！」

「カナさん…ありがとうございます！やっぱり皆さんいい人ですね…」

私は少し目頭が熱くなつてきた

「仲間を守るのは普通よー」

「そう…ですねー」

私は恵まれているだろう、こんないい人達に囲まれてるんだから

『サイカ大丈夫？』

『大丈夫だよお姉ちゃん、もう暴走したりしないからさ！』

『残りの黒い感情も早く魔力に変換しなさいよ！ちよつと気を抜くと暴走するんだからー！』

『わかつてるよお姉ちゃん、さすがにこれ以上迷惑かけれないよ、けどこの力を役立てることも出来るかもしれないからさ』

『そんな時はすぐこないでしよ、だから早く変換すべきよ！』

『危なくなったら、変換するよ』

『はあ、全然言うこと聞いてくれない妹ね…反抗期かしら？』

お姉ちゃんが呆れたように言う

『違うもん！私はギルドの皆に恩返ししたいだけだもん！』

『そっか、まあ好きなようにすればいいわ、けどそんな力を使うときは来ない方がいいんだけどね』

『そうだね』

そんな思いとは裏腹に、数日後には事件がおきた……

第三章 幽鬼の支配者

第八話 エマールカインド

暗い狭い部屋の中で私は1人：

ここを出ればお姉ちゃんがいる：

けれど私にはここを出る力も勇気も持っていない：

外でお姉ちゃんとは戦ってるのに私はいつも部屋の中：

安全な場所でいつも守られて生きている：

私に少しでも、ほんの少しでも力があれば……

夢から覚め、ガバっと私は身体を起こした。

汗に濡れたパジャマが肌に張りつき気持ち悪い……

嫌な夢だった……

もうほとんど内容は思い出せないが不快な感覚だけが胸に渦巻いている……

『サイカ大丈夫？なにか怖い夢でも見た？』

『大丈夫だよ、ちよつと嫌な夢を見ただけ……』

『早く黒い感情を捨てなさい、色々影響出てるじゃないの』

『嫌だ……これがないと私、皆の役に立てないもん……』

『暴走したら元も子もないのよ？どころか迷惑をかける可能性だってあるんだから……』

『だけど……』

『まあ……いいわ、サイカが大丈夫だと思うなら私はそれを信じるわ

本当に無理はしてないんでしょうね？』

『大丈夫だよ、無理は全くしてないから！ふふっお姉ちゃんありがとうね！』

『はあ……調子いいんだから……』

今日から復帰するだっけ？』

『うん、そのつもり丁度ルーシイさん達も島から帰ってくるみたいだし、ギルドに行く前に駅で皆を待とうと思ってるの』

『あああの勝手にクエスト行つてた組ね……』

『やつぱり何か罰とかあるのかなあ?』

『さあ?けどまあ何かしらはあるんじゃない?』

『だよねえ…あんまりきつい罰じゃなかったらいいんだけどなあ……』

『人の心配よりも自分の心配をしたらどうなの?』

こないだの1件であなたが生きてることはバレちゃったんだし、これからまた狙われるかもなんだから……』

『大丈夫だよお姉ちゃん、今の私達は昔程弱くはないし、それにギルドの皆もいるからね!』

『本当にいざという時頼れるの?』

昔だつて2人には迷惑かけられないつて頼らなかったのに……』

『うう…確かに……』

けどあの時の2人はまだ子供だったし……』

『あらあら、友達が頼りなかったみたいだに聞こえるわね』

この事2人が聞いたら悲しむかもしれないわよ』

『うう…お姉ちゃんが虐めるう……』

『ごめんごめん、ちよつと言いきすぎたわ』

『むう……今日のお姉ちゃん意地悪……』

『けどもしギルドの皆が到底かなわなような相手が現れたとして、それでもサイカは皆を頼れるの?』

『多分頼るとかそういうのじゃないと思うの…』

あの人達は無条件で私を助けてくれる、助けようとしてくれる……私も無条件で皆を助けようとする、それがギルドつてもものだと思うの……』

『そっか、良いギルドに入れたんだね……あの木のおじさんのお陰だね』

『そうだね!また時間が出来たら会いに行かないと!!』

そこまで話して、私がふと時計を見ると家を出ようと考えていた時間がかなり近づいていた。

「いけない!」

そろそろ準備して家出ないと！」

『ほらほら、ちゃちゃつと準備しないと遅れるよ〜』

そんな姉の声を聞きながら私は急いで支度をし、家を出た。

「みくなき〜ん」

私は駅から出てきた皆に声をかける。

私を見つけた皆は、すぐに駆けつけ大丈夫だったかと口々に言っただけさる。

どうやらクエスト組も拉致られた事は聞いているらしい……

「はい、問題ありません！」

少しの間家でごろごろしていたので今はもう元気です!!」

「よかったあ…向こうでミラさんにサイカの事聞いた時は本当に不安だったのよ！」

「あれ？」

その時には私の無事は確認されてますよね？」

「それでも心配せずにはいられないでしょ!!」

やはり優しい方々ですね……

「すみません、心配かけて！ですが私はもう大丈夫です！」

それよりも勝手に行った時の罰の心配はしなくていいんですか？」

私がそう言うと少しだけ3人の顔色が青くなった気がした。

「【あれ】は確定だろうな」

ボソツとエルザさんが言う。

あれって何ですかね？

「【あれ】があるのか!？」

「【あれ】ってなんなの!？」

「【あれ】だけは嫌だあ!!」

と口々に【あれ】について話しているが結局何なのかは分からない。

けれどとりあえず場に合わせるため私も

「ああ【あれ】ですかあ……」

とだけ言いにごにこと笑顔を浮かべておいた。

ナツさんとグレイさんの怖がってる姿や困惑してるルーシイさん

の姿見るのは割と面白いですね。

そんな事を思いながら私は皆と一緒にギルドに帰った。
ギルドが少しづつ見えてきたのだがその光景はいつものそれとは似ても似つかないものだった……

何故か鉄の塊がギルドのそこらじゅうに突き刺さっていたのだ
私達は急いでギルドに入ったがそこには誰も居らず、地下から出てきたミラさんに連れられ私達はマスターの所に向かった。

「マスターこれはどういう事ですか!!」

開口一番エルザさんが大声でそう言い放つ。

「ファントムの奴らだ」

誰かがそう言った気がしたが、あまりの事に気が動転していた私には誰がそう言ったのかは判別出来なかった。

ナツさんが今すぐファントムに殴りこもうと、マスターに意見するがギルド間抗争の禁止でそれは出来ないと言われミラさんになだめられる。

確かにルールは大事ではあるがここまでされていて何もするなど言うのはあまりに酷だ……

多分ここにいる皆もこういった悔しさを今噛み締めているのだろう……

だけれどマスターが何もしないと云うのなら動くわけにはいかな……い……

ここは我慢するんだと自分に言い聞かせ私はギルドを後にした。

その後もやもやしたままハーブや食料品を買い歩いていると家に帰る頃には日が傾いていた。

家に入ると何故か2階が騒がしかった……

2階は私の寝室兼植物を育てるスペースになっている。

もし私以外の人間が入ったなら即座に縛り上げるよう植物達にお願いしているので2階が騒がしい時は大体泥棒が入った時だった。

一様自営業をしている身、蓄えは割とあるので念には念をと云うことで植物達に警備を任せているのだ。

「はあ……また泥棒さんですか……」

そう呟きつつ私は階段を登り扉を開ける。

「あ、サイカ！」

「この蔦どうにかしてくれ!!」

扉を開けると何故かそこには蔦に縛られているナツさん、グレイさん、エルザさん、ルーシイさんの4人がいた……

「何……してるんですか?」

話を聞くとナツさん、グレイさん、エルザさんは不法侵入

ルーシイさんは私の家から謎の声が聞こえたため泥棒ではないか
と思い、悪いと思いながらも確認しに来てくれたそうだ。

ルーシイさんは無罪だ。

「それで何で3人は不法侵入を?」

「ファントムがギルドを襲った時に名簿を見られていた可能性がある
ので、念のため出来るだけ集まっていた方が良いという事で集まった
訳だ」

「何故私の家に?」

「お店でもあるサイカの家が1番綺麗なのではないかという理由だ」
「なるほど、そういう理由なら3人も無罪ですね」

『えっ!?不法侵入についてはいいの!?!』

急にお姉ちゃんが反応する

『え、だってお泊まり会だよ！』

「楽しそうでしょ!!」

『そ、そう……サイカがそれでいいならいいわ……』

「ファントムの目的って何なんでしょうね……」

「分からない、ただの挑発にしては少し目が余る」

「ですよね……これ以上何もしてこなければいいのですが……」

「俺は黙ってられねえぞ!今すぐにでも殴り込みに行きてえ!!」

「もしファントムと戦ったとしたら戦力的にはどうなるの?」

「互角だろうな……向こうのマスターのマスタージョゼはマスターと同じ
聖十大魔道の称号を受けている人物だ」

「聖十大魔道?」

「簡単に言うとファイオーレ内で最も優れた10人の魔道士の事です
よ」

「それにフアントムにはこちらで言うS級魔道士のエレメント4という4人がいる」

「あとは私やナツさんと同じ滅竜魔導士が1人いますよね」

「滅竜魔導士って割といるものなの？」

「いえいえ、レアな魔法のほうですよ、何故かここに2人いたりしますが。」

いや、正確には3人ですね」

「3人？」

「はい、お姉ちゃんも滅竜魔導士ですし」

「え、けれどお姉ちゃんって……」

「えっと、ルーシイさんとあの1件の時にギルドにいた方には言ったのですが3人には話していませんので、まずその話からですね」

そう言っつて私は連れ去られた理由の魔法の話をし始めた。

「というのが私の本来の魔法なんです」

「確かにそんな魔法なら闇ギルドにも狙われるかもしれんな……」

「まあさつきも話した通り私は魔法や人格まで請け負えるんです。」

そして私はお姉ちゃんが亡くなる寸前にお姉ちゃんの肉体以外の全てを魔法で請け負いました。

今もお姉ちゃんは私の身体の中で生きてるんです、だからほら」

「……………つてサイカ！急に交代させないで！！私にも心の準備つてものが！！」

「えっと……もしかして……サイカのお姉さん？」

ルーシイさんが恐る恐る聞く

「そ、そうよ、私はサイカの姉のエマ＝カインドよ。色々妹がお世話になっつてるみたいだしこれから仲良くしてあげて……」

ねえサイカそろそろ交代しましょ。

私はこの人達と別に話したい事とかないのよ」

「私はエマさんと聞きたい事があるんですけど……」

『私はお姉ちゃんに皆と仲良くなって欲しいんだけどなあ……』

「……………はあ分かったわよ、それで何が聞きたいのかしら？」

あとエマでいいわよ」

「サイカとエマの事を教えて欲しいな」

「サイカの事ならいくらでも話せるわよ！」

あの子は困ってる人がいると絶対ほっておけない子なのよ！それのせいで大変な事もあるけれど……うんぬんかんぬん

それにめちやくちや可愛いでしょあの子！妖精って表現が……うんぬんかんぬん」

『そろそろお姉ちゃんストップ!!』

「え、これからがいい所なのに……」

『皆が驚いてるから……』

「あ、えつとごめんさい、ちよつと熱くなりすぎたわ」

『私もドン引きだよ……』

「え……サイカに嫌われた………死のう……」

『ストップ!!嫌いにはなってるから!!大好きだから!!』

「ほんとうに大好き？」

『本当、本当!』

「そつかよかった……」

後に聞いたことだが、この時3人は姉の痴態を見ていて同じ事を思っていたらしい『大変な姉をもったなと』

「え、えつとそろそろエマについても知りたいんだけど……」

「あ、私はサイカの姉って認識だけで大丈夫よ」

『大丈夫はない!!もつと何かあるでしょ!!』

「好きなものはサイカ、好きな食べ物もサイカ、好きな場所はサイカの中よ!」

「サイカって美味しいのか!？」

『ナツさあん!私食べ物じゃないからね!!』

しかし私の声はお姉ちゃんにしか届かない

「あと嫌いなものは闇ギルドとサイカの知り合い以外の人間よ」

「サイカが好きって事がよく分かったわ……」

『お姉ちゃん……』

「正直サイカ以外の事は自分を含めどうでもいいのだけれどサイカが仲良くして欲しいって言ってるし、まあ仲良くしてもいいとは思って

るわ。

まあ人格だけになってからはサイカ以外で話す人とかもいなかったし、こうやって話すのもまあ悪くはないわ……」

それを聞くとルーシイさんはくすくすと笑い出した

「ふふつエマって素直じゃないのね」

「わ、私は素直よ!!」

「これからよろしくねエマ」

にこやかにルーシイさんが笑う

「……こちらこそよろしく」

ボソツと小さな声でお姉ちゃんは答えたがきつと恥ずかしいんだろうなあと思っていた。

そこからお姉ちゃんが皆さんと仲良くなるのは早かった。

ナツさんともグレイさんともエルザさんともかなり仲良くなったと思う。

時々私の恥ずかしい話が暴露されたりしたがお姉ちゃんが皆さんと仲良くなるなら安いものだ……恥ずかしいけど……

そんな風に皆さんが仲良くしてる中突然問題が起きた。

始まりはルーシイさんの悩みは無いのかという質問だった。

「あるわ!しかもかなり重大なものが……」

深刻そうな声でお姉ちゃんが言う。

「どんな悩みなの？」

もし私が手伝えることなら私も手伝うわ」

「ほんとに!?!」

あのね、サイカを抱きたいの!!」

「ん?」

さつきまで真剣に聞いていたルーシイさんの頭の上にはてなマークが浮かんでいる。

「私が身体動かせるのってクーちゃんかサイカの身体なのよね……」

クーちゃんだと抱きしめは出来るけど体温が分からないし、サイカの身体だと無理があるのよね……」

「な、なるほど……?」

「だからルーシイお願い！」

ちよつと身体を貸してくれないかしら？」

「それなら別に大丈夫よ、好きなだけサイカを抱きしめてあげて！」

「ありがとう、ルーシイ!!」

持つべきものは友ね!!」

少し前まで私以外はどうでもいいとか言ってたのはどこのお姉ちゃんだろう……

てなことがあり私は今ピンチに陥っている……

エルザさんは気を利かせて(?) ナツさんとグレイさんを連れて1階に降りて行つたし……

姉妹水入らずの場に私達はお邪魔だな、だそうだ……

ルーシイさんは現在お姉ちゃんに身体奪われてるし……

あ、ハッピーさんがいるじゃない!!

「ハッピーさん助けて!!」

「ニャー」

「ちよつとハッピーさん!?!」

「ニャー」

「この人でなし!!」

違うな、猫でなしかな?

いや、それどころじゃないんだ!!

落ち着け私……

現状私を助けてくれる人も猫はいない

魔法はお姉ちゃんに奪われてる

手足は蔦で縛られて逃げれない

目の前にはやばい目をして息が荒いお姉ちゃん……

あーこれ詰んでるよね……

「お姉ちゃん、何するか分からないけど怖いからやめて欲しいなあ……」

「安心して怖い事じゃないから!!」

気持ちいいだけよ!!

私がサイカに怖い事するわけないじゃない!」

「もう今この状況が怖いです……」

「そうなの!?!ならその感情は私が貰ってあげるわ」
ここにことしながらお姉ちゃんは言う。

あ、確かに怖く無くなった!

じゃなくて!今はピンチ!

分かって、私!

「お姉ちゃん、そろそろ正気に戻って」

「私は正気よ?何を言っているの?」

「いつものお姉ちゃんならこんな事しなよね?」

「しないわけないじゃない!」

「そうだよね、しない……わけないの!?!」

「いつでも私はサイカを愛でてていたいわよ」

眩しい程の笑顔でお姉ちゃんは言っている……

こりやダメだあ………

次の日起きた時私は隣りにいたルーシイさんにゆうべはお楽しみ
でしたねなどと言われてしまったのでした……

第九話 燃心竜

「ルーシイさん、姉がご迷惑をおかけいたしました……」

ルーシイさんの身体をまさかあんな風に使うなんて……」

「いいのよ、気にしてないから！確かに驚いたけれど……」

「すみません、あんな姉で……」

「今エマは何してるの？」

「今は幸せそうに寝てます……」

「あはは、ほんとに幸せだったのね」

「はあ……困った姉です……あとまた身体を貸して欲しいと言ってくると思いますが貸さないでくださいね！」

絶対駄目ですからね!!」

「わ、分かったわ」

「少し嫌な予感はしていましたがまさかこんなことになるとは……」

私には感情に飲まれるなどか言つときながら、お姉ちゃんが飲まれてどうするんですか……」

あれ？そういうえば何故か植物達がざわついてる……」

「ルーシイさん!!何か変です！」

「急にどうしたの!!」

「植物達がかかなり怖がってます！」

何かあったみたいで、この感じだと多分怪我人が出てます！

私は植物達に頼んで場所を把握しますのでその間にルーシイさんは皆さんを起こして来てください!!」

「わ、分かったわ！」

そう言うところルーシイさんは急いで1階に降りて行った

「多分方角的に中央公園かな？」

あの辺の特に大きな木の辺りがざわついてるみたい……」

誰かがそこで倒れてるのかな？」

ごめんね、植物さん達ちよつと調べて来れるかな？」

私がそう聞くと植物達は一斉に動き出しすぐに部屋の中からいなくなつた。

…久しぶりに部屋の全貌を見た気がする……

「起こしたわよ！」

1階からルーシーさんの声が聞こえる

「植物達に詳しい事は今調べてもらってますが数名が中央公園で怪我をしているようです!!」

私は植物さん達から詳しい事を教えてもらって、必要な場所に連絡した後に向かいますので皆さんは先に行って出来る限りの治療をしていて下さい!!」

「分かったわ！」

ほらナツきちんと起きなさい!!」

1階の皆さんはすぐに家を出たようだ、そのすぐ後植物達は帰ってきました。

植物達が教えてくれた情報はこうだった……

フェアリーテイルの魔道士3人が木に磔にされている

「シャドウギアの皆さんが……」

私はギルドと魔道士病院にラクリマで連絡してすぐに中央公園に向かいルーシーさん達と合流する

公園には磔にされ、ファントムの紋章を刻まれていたシャドウギアの皆さんがいた……

「ここまでするなんて…許せない…誰がこんな事を…必ず私がころサイカ!!」

『え、あれ?お姉ちゃん起きてたの?』

『途中から起きてたわ…』

それよりも少し落ち着きなさい』

『ごめん…もう大丈夫、治まったから…』

「マスター！」

急にエルザさんが声を上げる

私が振り返るとそこには見てわかるほど怒りをあらわにしたマスターがいた

マスターは私達の横を通り木の下まで行くときと呟く

「ボロ酒場までなら我慢出来たんじゃがな…」

「ガキの血を見て黙ってる親はいねえんだよ…」

「戦争じゃ!!」

「フェアリーテイルじゃ!!」

ナツさんが扉をぶち破りギルド皆さんがファントムのギルドになだれ込む。

私は近くにいたファントムの1人を縛り上げ質問する

「すみません、うちのギルドを襲ったのって誰だか知りませんか?」

「おい! 解きやがれ!!」

私は右手に黒い魔力を纏わせファントムの方に触れる、すると小さな悲鳴をあげた後すぐにガジルがやったと吐いてくださった

私ありがとうございますとだけ言うとその方を眠せる

鉄竜の滅竜魔導士の方ですか…

同じ滅竜魔導士として恥ずかしいですね…

「ここは任せたぞ

ジョゼはおそらく最上階、ワシが息の根を止めてくる!!」

そういうとマスターは階段を駆け上がって行った

するとマスターがいなくなるのを見計らったかのように、天井の梁からガジルさんが降りてきた

ちょうど着地点の近くにいた私は、周りの人を蹴散らしながら着地したガジルさんを前置き無しに殴りつける

「黒心竜の鉄拳!! てか硬っ!!」

殴られたガジルさんよりも殴った私の方が確実に物理的ダメージが大きい

まあ黒心竜の攻撃は物理ダメージが主では無いので良しとしよう

精神の方にはダメージがきちんと入っておりガジルさんは少し困惑している

きつと精神的なダメージはあまり経験無いのでしょうか

「てめえ何もんだ?」

妖精の所の滅竜魔導士は火竜だって聞いていたが、てめえも滅竜魔

導士なのか？」

「別にどうでもいいじゃないですかそんな事、まああなたがレビイさん達にお詫びをするなら教えてあげてもいいですけど」

「ふざけんな、誰があんな奴らに詫びるか！」

「はあ正規ギルドにも腐ったギルドはあるんですね」

まあとりあえずそこはいいです、今はあなたをボコボコにするのが先決です」

「ほお、やれるもんならやってみな！鉄竜棍!!」

私はすんでのところを捻りそれをかわす。

その後即座に距離を詰め、蹴りを入れようとするがガジルさんは反応し後ろに飛ぶ…がこっそりと成長させておいた木にぶつかり私の蹴りを避けれる距離まで下がれなかった

「燃心竜の鉤爪!!」

私の強化された蹴りがガジルさんの脇腹にささる

やっぱり硬い…けど燃心竜の状態だったら物理ダメージも多少は入るみたいね

怒りの感情は私に攻撃力の上昇と火属性を与えてくれる

そして現状私は黒い感情を溜め込んでいる

怒りの感情と黒い感情の殺意を併用する事により、私の攻撃は今鉄竜の身体をしても防御しきれない程の物理攻撃と防御不可能の精神攻撃を同時に使う事が出来る

かなり魔力を消費してしまうためあまり長時間は戦えないが、この感じなら私の魔力切れより先にガジルさんを倒せるだろう

そういう計算を頭の中でしていると天井から何かが落ちてきた

何かが落下した所を見るとそこには何故かマスターが倒れていた

……

「マスター!?!」

ぱっと見ても分かる程にマスターは衰弱している

何でマスターが…ジョゼという方はそこまで強いのですか…?

いや、それどころじゃない今すぐマスターを連れてここから離れないとー!

「戦ってる時によそ見なんて俺もなめられたもんだなあ！」

マスターの事で頭がいっぱいになっていた私は近づいて来ていたガジルさんに全く気づいていなかった

背中に衝撃を受け私は近くの壁まで吹き飛び体を叩きつけられる

「かはっ……」

痛ったい…

とりあえずこの人をどうにかしないといけないみたいです…

「おい、その程度か！」

「今はあなたにかまってる暇はないんですけどね!!」

「てめえの都合なんざしらねえなあ！」

「まあそうですよね……急いで倒しますか！」

「撤退だ!!」

今すぐ戦おうとしていたがエルザさんのその言葉で私は臨戦態勢を解く

エルザさんがそこまで言うとうことはマスターの容態がかなり悪いんだろう

ギルドの人達もしぶしぶながら後退して行っている

私も撤退したいのだけれどガジルさんを見ても、私を逃がしてくれる気は無さそうだ

「とりあえずギルドの皆さんが撤退してから私も撤退しようかな…今行くとガジルさんが皆さんを巻き込みそうだし……」

魔力を温存しつつ時間稼ぎをする感じでいこうか

【爆発花を足下に咲かせて動かないよう言う作戦】

火力が低かった為無視して突っ込んで来たので失敗

【睡眠花で眠らせる作戦】

花粉を浴びせる前に斬られた為失敗

【ひたすら避ける!!】

無理!!!

あれやこれやとやってるうちに私の傷は増えたがギルドの皆さんは撤退出来たようだ

そろそろ私も逃げないと……

「おい、何でさっきから滅竜魔法を使わねえんだ？」

「魔力温存のためです」

「なめてんのか？」

「いえいえ、なめてはいませんよ」

今は私撤退しないといけませんので次会った時には本気で戦うということにしませんか？」

「駄目だな、こんな機会簡単には逃せねえ」

「はあ……ナツさんといい滅竜魔導士ってなんでこう戦い好きなんですかね……どこの戦闘民族ですか……」

まあそれでも今回は逃げさせてもらいますからね」

そう言うとすぐに私とガジルさんの間に大きな花を咲かせ壁を作り、出口に走り出す

「待てこら!!」

追いかけるためにガジルさんが花を傷つける、すると中から大量の花粉が放出された

そのすぐ後時限式で設置しておいた爆発花が爆発する

爆発によつて起きた火花が宙に舞っている花粉に引火し……